

# 聖徒の道

7 1976





末日聖徒イエス・キリスト教会

1976年 7月号

**大管長会**

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

**十二使徒評議員会**

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
デルバート・L・ステイプラー  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト

**諮問委員会**

ハワード・W・ハンター  
デビッド・B・ヘイト  
ロバート・D・ヘイルズ  
O・レスリー・ストーン

**教会誌編集主幹**

ディーン・L・ラーセン

**国際機関誌**

ラリー・ヒラー (編集主幹)  
キャロル・ラーセン (編集副主幹)  
ロジャー・ギリング (デザイナー)

**「聖徒の道」**

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

**も く じ**

結婚と人生	スペンサー・W・キンボール	281
南太平洋の教会	R・レニエル・ブリッチ	285
日々の恵み		290
自分で作るおもちゃ		293
ヒラマンと二千人のゆうしゃ		295
だれかのために		297
あかちゃんペリカン		299
かいたくしゃのほろぼしゃ		300
家庭における財政管理	マービン・J・アシュトン	303
南太平洋の夜明け		305
ローカル・ニュース		310

**今月の表紙**

これは1936年にトンガのババウ地方の扶助協会の姉妹たちが作製したタッパ布で、現在テンプルスクウェア内の博物館に保存されている。トンガの伝統美の中に末日聖徒としてのテーマを盛り込んだこの作品は、世界中に伸びゆく教会の姿を如実に示すものである。

**聖徒の道 7月号**

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-8-10  
配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都港区南麻布5-10-25  
定 価 年間予約1,700円 1部 150円  
海外予約1,700円

# 結婚と人生

大管長  
スパンサー・W・キンボール

1974年8月スウェーデン・ストックホルム  
地域総大会における説教

この度、私たちは皆さんと身近に接し、皆さんが肉体的にも精神的にも力を増しておられることを知った。そうした皆さんに、今私たちが得ていただきたいと思っているものは、山のような金でもなければ広大な土地でもない。またこの上なく美しい家でもきらめく宝石でも、さらには俗世の人々からの賞賛でもこの世の宝でもない。私たちが望むのは、偉大な父親ダビデがその子に望んだことである。しかし、これにはさらに大きな意義がある。それはこの賢明な息子が、栄華を極めたときに自らもそう願ったということである。

父、ダビデ王は次のように祈った。

「またわが子ソロモンに心をつくしてあなたの命令と、あなたの証と、あなたのさだめとを守らせて、これをことごとく行わせて下さい。」(歴代上29:19)

私たちは今日、結婚と人生というふたつの事柄を一緒にして考えてみたいと思う。なぜなら結婚は人生にあってきわめて重要な意味をもつものだからである。



主は言われた。

「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。」(創世2:24) また主は言われた。「……ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ……」(創世1:28) このようにして、すべての正常な男性、女性のための計画が定められたのである。主は、彼らが伴侶を見出し、結婚して子供たちと共に喜びと幸福の日々を送るように望んでおられる。

最近、私は35歳になるというひとりの帰還宣教師に会った。この青年は伝道を終えてから14年も経つというのにまだ独身であった。しかし、自分が独身の身であることを気にかけていないどころか、全く問題にしていなかった。

私はこの青年が大いなる裁き主の前に立つ日のことを考えると、かわいそうに思う。その日、主は青年にこう尋ねられる。「あなたの奥さんはどこにいますか」と。彼がこの地上で仲間たちにしてきたどんな言い訳も、裁き主に答えるときには、何と浅はかで愚かなものとなることであろうか。「とても忙しかったのです」とか「まず教育を受けるべきだと思ったのです」、「ふさわしい相手が見つからなかったのです」などという答えは空しいものであり、その人の立場を正当化するものとはならないのである。彼は妻となる人を見つけ、その人と結婚し、その人を幸福にするようにとの戒めを受けていることを承知していた。また、自分の義務が子供たちの父親となり、彼らが豊かで満ち足りた人生を歩めるように扶養することであることも知っていた。彼はこれらのことをすべて知っていた。それにもかかわらず、自己の責任を引き延ばしたのである。そこで私たちは、住んでいる国や習慣に関係なくすべての若人に、天父はあなた方が永遠の結婚をし、立派な強い子供たちを育てるように望んでおられるということを申し上げたい。

主は、男と女が互いに伴侶を見出し、幸福な家族関係を持つように、また互いに忠実であり、清くふさわしくあるように計画された。

主は、この「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」という戒めを与えなくとも私たちの世界を組織することができたはずである。つまり、何か別の方法を使って育てた形だけの人間でこの地上を満たすということだけが、主の大いなる目的ではなかったように思われる。主はすべての子供が父親と母親を持つように計画された。父親と母親はふたりの間に誕生した子供を愛し、正義と純潔を教え、その子が天の御父に似た者となるように指導しなければならないのである。主は、人生の大半を独身のままで過ごすようにとは決して意図されなかった。ふさわしい時に、若い男性は自分にとって最良の若い女性を見出すべきであり、若い女性もまた最良の伴侶となり得る若い男性を見出すべきである。主は結婚をだらだらと引き延ばすことを認めてはおられない。

現在、まだ多くの若人は神殿の建てられていない国に住んでいるが、それでもおおむね無理をしないで行ける距離

内に神殿がある。私の若い頃、聖徒たちは神殿結婚のために800キロから1,200キロも旅行したものである。

私たちは皆さんが正しい交際を経た後、新婚旅行を一番近くの神殿に行くよう計画し、永遠の結び固めを受けるように心から望んでいる。そうすれば、生まれて来る子供たちはとこしえに皆さんのものとなり、皆さんも永遠に彼らの両親となるのである。そしてそれは、永遠の結婚となる。

私たちはまた、皆さんの御両親が皆さんの幼少の頃から家の手伝いやアルバイトをして収入を得、それを伝道資金や結婚資金として貯えるように教育して下さることを望んでいる。

私たちは若人がうわべだけの華やかな結婚式や披露宴を進んで捨て、普通は両親と共にであるが、聖なる神殿に行き結婚するように願っている。披露宴や休暇、高価な贈物に要する費用は、時に神殿結婚に比べてはるかに多額である。キンボール姉妹と私が結婚したときは指輪もなかったし、ぜいたくな披露宴もなかった。そして8年後に私は小さなダイヤモンドの指輪を買ってあげた。彼女はそのときまで喜んで待ってくれたのだった。

皆さんが望ましくしかも堅い絆で結ばれた結婚を計画し、将来の予定を立て、標準を定める時は今である。また美しく実りある結婚生活への備えをするよう決意を固める時は今である。

愛する若人の皆さん、皆さんは真剣に取り組まねばならない。人生は陽気で愉快なことだけとは限らない。極めて真剣に取り組まなければならない。初めの数年間は男の子も女の子も一緒に交わりながら子供として成長していく。そして十代を迎えるが、まだそこでも皆さんの交際は広く浅くという状態にとどめ、一対一の交際は少なくとも16歳になるまで待つべきである。また、たとえその年齢に達したとしても相手の選択は真剣に行なわなければならない。

また、男性は19歳になると伝道に出るので、親しく交際できるのは数年間に限られる。交際は制限されて当然であるし、肉体的な関係を含むどのような親しい関係にも足を踏み入れることがあってはならない。どのような形であれ、婚前の肉体関係は断じてあってはならないのである。

すべての若い男性は伝道資金を貯金しておくべきであり、宣教師になるための資格を失わせてしまうようなものには、どのようなものであってもかかわり合いを持ってはならない。21歳で伝道を終えて帰った兄弟は、自由に交際を始める。そして自分にふさわしい女性を見つけると、正しい神殿結婚をするのである。人は自らを管理し、正しい過程を踏むとき、このすべての祝福を受けることができる。伝道前の広く浅い交際、そして伝道、コートシップ、そして神殿結婚という順序である。これ以外の道を歩むと必ず窮地に陥るであろう。

結婚したら妻は子供の出産と養育に専念しなければならない。妻が子供の出産を延期したり、夫の学業を支えるために働きに出たりすることを認めた聖句はないし、そう語った教会幹部もない。

教会の若人は、次のJ・ルーベン・クラーク・ジュニア

副管長の話を悟るべきである。

「私が非常に危惧していることは、性欲は単に満足感を得ること、すなわち快樂のためにのみ私たちに植えつけられており、子供ができるのは全く不幸な出来事にすぎないと考えている人がいる。事実とは全くこの逆である。性欲は霊を宿す肉体を生じるために与えられたものである。満足感を得ること、すなわち快樂はそれに付随して起こるものであり、欲望本来の目的ではない。」クラーク副管長はさらに次のように述べている。

「結婚生活における性について、末日聖徒に必要な論文を書くとするれば、ふつうの文にまとめることができよう。

『性欲の第一の目的は子供をもうけるためであることを心に留めるように。性の満足は第一の目的に基づいた上で得られなければならない。』夫たるあなたは親切でありなさい。そして妻を思いやりなさい。妻はあなたの所有物ではないし、単に衣食住の便を果たすだけの人でもない。彼女はこの世においても永遠にわたってもあなたの配偶者なのである。」(Conference Report「大会報告」1949年10月P. 194, 95)

結婚についてお話するに当り、まずルカの言葉を心に留めよう。

「狭い戸口からはいるように努めなさい。事実、はいらうとしても、はいれない人が多いのだから。」(ルカ13:24)

人は日の栄の結婚を通じてのみ真つすくな狭い道を歩むことができる。他のいかなる方法によっても永遠の生命は得られない。主は結婚について極めて具体的かつ明確に述べられた。

「そもそも今は警めを告げる時にして、多くの言を費すべき時にあらざるなり。主なるわれは、末の世に於て欺かれざればなり。」(教義と聖約63:58)

聖典には「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」(マタイ22:32)と記されている。

ここで言っている死んだ者とは、律法や恩恵、祝福、さらには神殿結婚を通じて得られる永遠の賜に対して死を選んだ人のことであり、これ以外に死んだ者はいないのである。物事を合理化して自分勝手な結論を導き出し、抜け目なく吟味を重ねながら自分自身の意見を発展させる。しかし結局のところ「とげのあるむちをけて傷を負っている」のである。彼らは自らの機会を自らの手で閉ざしている。

何年か前、私のもとにひとりの母親がひどくやつれた様子で訪ねて来た。息子夫婦が事故に遭って、幼い子供たちを残したまま帰らぬ人となったのである。悲嘆に暮れてやって来た彼女は、飛行機の墜落事故の犠牲となった若いふたりが神殿結婚をしていなかったことを話してくれた。ふたりは共に良家の生まれであった。神殿結婚そのものを無視したか、それとも何かの理由があって引き延ばしたかどちらかであろう。また彼らは、成人してから後の数年間をこの地上で過ごしたにもかかわらず儀式を受けなかった。「死がふたりを分つまで」という民事結婚は、飛行機事故によってふたりを離れ離れにし、子供たちを孤児にしまったのである。

もちろん、ふたりの死から1年経てば、だれかが彼らのために身代りの儀式を受けることができる。しかし、生存中に取るに足らないと思っていた儀式を、彼らが死後受け入れるだろうか。そして何よりも大切なのは、神をそこまで欺くことができるだろうかということである。神は生きている者の神であり、死んだ者の神ではない。神は神殿結婚を生きているふたりによって行なわれるべきものとして定められたのである。

皆さんは死というものに何の魔力もないことを御存知だろうか。呼吸が停止したからと言って神の言葉に心向けなかった人を天使にすることはできないし、不信者を信者に、また無神論者であった者に信仰を持たせることはできない。

皆さんは10人の処女のたとえ話を注意して研究されたことがあるだろうか。約束された祝福を受けるために準備していた者は与えられ、用意のできていなかった者は追い出されてしまった。引き延ばしは盗みと同じである。

教会が回復された初期の頃、主は多くのことを語られたが、それは聖典を読む者にとって警告となるものであった。しかし彼らとその戒めを理解しなかったので、主は再び告げて言われた。

主の声に心を留めなさい。

「……もしある男妻を娶り今も永世にもこれと誓うに、もしその誓われに由らずまたはわが律法なるわが言によらず、わが聖職に任じてこの権能に任じたる者を通じて『約束の聖きみたま』によりて結び固められずば、彼らこの世の外に去る時その誓無効にしてまた効力なし。その故は、彼らわれに由りてもまたわが言によりても結ばるるにあらざればなり、と主は言う。彼らこの世の外に去る時、その誓は未来の世にて受け入れられず、その故は諸天使および諸神ありてその処に任せられ、これらに由りて其所を通過する能わざればなり、これを以て彼らはわが榮を受け嗣ぐことを能わず、わが家は秩序の家なればなり、と主なる神言う。」(教義と聖約132:18)

主は、天使に与えられる報いは第二位に属するものであり、「遙に高き光榮に適しき、また優れたる光榮、永久の効ある光榮に適しき者」に与えられる祝福には劣ると、明確に語りたもうた。」(教義と聖約132:16)

主は、この結婚を正しい方法で準備する若人に大いなる約束を与えておられる。

「……彼らは彼処に置かれたる諸天使諸神の前を通り過ぎ、各々その頭に結び固められたる如く、各々最高の榮に進むを得てあらゆる事に光榮を受くべし。……」(教義と聖約132:19)

これは見解に左右される問題ではない。また、皆さんや私がいろいろと検討を加えるべきことでもない。事実なのである。裁き主は門口で諸々の記録と霊と真実の記録を確実に知るであろう。そして「いのちの書」(黙示20:12)によって、私たち一人一人のこの地上における行動が明らかにされるのである。

私は規準や規定とそれに伴う栄光や恩恵について繰り返

し述べてきた。なぜなら私たちはそれらの事柄に注意を向けずに素通りしてしまう傾向にあるからである。しかし主はジョセフ・スミスに幾度となく授けたもうた啓示の中で、次のメッセージを繰り返して述べておられる。私達も聖典の中にあるこの言葉を何回となく読んだはずである。主はこう言われた。

「誠にまことにわれ汝らに告ぐ、汝らわが律法を守るにあらざればこの光榮に達するを得ず。」(教義と聖約132:21)これ以上に卒直かつ明白な言葉があるだろうか。議論や理屈を弄する余地は全くない。

若い女性が恋人に向かって、「もしあなたが神殿推薦状を得られなければ、あなたとの結婚はよすわ。たとえこの世だけであってもよ」と言うとき、シオンには新たな精神が芽生えるであろう。そして、若い帰還宣教師は恋人にこう言うであろう。「君を愛してはいるけど結婚はできない、残念だけど。神殿外の結婚なんて僕には考えられないんだ。」

これから少し明るい面について話してみようと思う。何週間か前、あるステーキ部を分割したときのことであった。それぞれのステーキ部の新しいステーキ部長を決めるため私は29人の男性と面接したが、その29人全員が永遠の結び固めを受けていた。彼らの子供の数は全部で121人、一家平均4.3人の子供がいた。一件の離婚もなく、波風の立っている家庭もひとつとしてなかった。121人の子供全員に両親がおり、死や離婚で家庭が壊された者はなかった。29人の男性は皆、かなり良い職業に就き、相当の住居を構えていた。子供たちのうち43人は十代であったが、危険な問題は全くなく、麻薬や飲酒、喫煙も皆無であった。全員が昇業に向かって着実に前進していたのである。

このような祝福や約束があるというのに、私は人々がなぜ正しく結婚せず、解けることのない凍てついた荒野の中で無為に人生を送るのだろうかと思議に思う。なぜ若人は神殿外の結婚をしようなどという浅はかな考えを起こして、手にすることのできる光榮を危くするのだろうか。また、なぜ神殿結婚をした人が離婚や別居、不道德なこと不義なことを考えるのだろうか。なぜ、一体なぜなのだろうか。

愛する兄弟姉妹の皆さん、私が以上のことを皆さんにお話したということをお忘れないうでいただきたい。皆さんは、私が戒めなかったとは決して言うことはできない。若人は素晴らしい。若人には豊かな素晴らしい約束がある。主は皆さんを愛しておられる。私達も皆さんを愛している。そして、私達たちは皆さんが正しい行ないをし、正しい生活を送る者に与えられる祝福を享受されるよう願っている。

私達たちは皆さんを信頼している。皆さんが耳を傾け、勉強し、祈りを捧げ、その生活を私たちの主、イエス・キリストが示された真つすぐで狭い道に完全に向けるとき、豊かな祝福と幸福な生活がもたらされることを約束する。

☆

☆



上：家族は、サモア、そして教会の力となっている。

下：教育は、南太平洋における教会の発展を促す上で、重要な役割を果たしている。  
このチャーチスクールは、バイオラの山村にある。

# 南太平洋の 教会

R・レニエル・ブリッチ

1820年春、ジョセフ・スミスが天父と御子の訪れを受けた頃、海の島々には福音を受け入れる備えが進んでいた。プロテスタントの宣教師が1797年に仏領ポリネシア（ソシエテ諸島、ツアモツ諸島、ツブアイ諸島、マーケサス諸島）にキリスト教を紹介した。1820年にはキリスト教宣教師がハワイに到着した。1820年代後半には、プロテスタントの伝道事業がトンガに根を下ろした。また1830年には、サモアでキリスト教宣教師の伝道が成功し、こうして、末日聖徒の宣教師が回復を説き、完き福音を教える以前から、聖書とイエス・キリストの教えはこの地域一帯に広まっていた。

19世紀、太平洋では捕鯨が主産業で、数百隻の捕鯨船に何千名という人々が働いていた。捕鯨船員のアジソン・プラットとベンジャミン・F・グローアードは後に教会に入ることになる。プラットは1822年に、船長と折りが合わないため、船がサンドイッチ諸島（ハワイ）に入港した際に下船した。彼は6ヵ月しかオアフ島に滞在しなかったが、島の思い出はその後長年彼の心に残った。1843年の冬、プラット兄弟が島での経験をジョセフ・スミスに話すと、アジソン・プラットとベンジャミン・F・グローアード、ノルトン・F・ハンクス、ノア・ロジャーズの4人に、まもなく太平洋諸島への伝道の召しが下った。一行は1843年6月1日にノーブーを発ち、10月9日、マサチューセッツ州ニューベッドフォードからテモレオン号で船出した。長く苦しい航海であった。召しを受けたときから病の床にあったハンクス長老は、航海中に死亡した。

1844年4月30日、ツブアイ諸島がタヒチの南640キロの洋上に姿を見せた。長老たちはジョセフ・スミスと十二使徒会からサンドイッチ諸島での伝道を命じられていたが、航海が長いと、ツブアイの住民が福音を説く聖職者を是非迎えたいと希望したため、現在は仏領ポリネシアとなっている地域を伝道の本拠地とすることにした。

プラット長老はツブアイに残り、グローアード長老とロジャーズ長老はタヒチに行った。しかし、ほとんど成果のな

いままに、タヒチを離れた。ロジャーズ長老は地域の島々を渡り歩いたが、ほとんど成功を見ずに、1845年の夏、帰国の途についた。

しかしグローアード長老は、タヒチから東のツアモツ諸島のアナア島に行き、すぐに成功を収めた。彼は1845年5月4日にこの島で伝道を始め、3週間後に最初の改宗者を得た。そして9月には620名の教会員で5支部が組織された。

その間ツブアイでは、1844年7月29日にプラット長老が教会初の外国語を用いる支部を組織していた。それは太平洋で最初の支部でもあった。1845年2月にはツブアイに60名の教会員がいた。

ところがグローアード長老はツアモツの聖徒たちを一手に管理しきれず、プラット長老を呼んだ。ふたりは1846年2月からアナアで働いたが、夏になると、グローアード長老が別の島でも伝道を始めることになった。やがて9月にはポリネシア人聖徒たちの第1回大会がアナアで開かれ、グローアード長老が帰島した。その大会には10支部の代表が集まり、総勢866名であった。

1847年3月、プラット兄弟は聖徒たちと家族の消息を知るために母国へ帰った。そして3年後、ジェームズ・S・ブラウンを伴って再び仏領ポリネシアへ戻った。このときはプラット家族とほかにも数家族が同行した。しかし不運なことに仏領ポリネシアの政情により伝道活動の続行が不可能となり、1852年には伝道部が閉鎖された。

長老たちが成功した最大の要因は、プラット長老とグローアード長老の住民への接し方であった。彼らはもっともらしい寄付金や無理な献金を求めなかった。ルイザ・B・プラットとキャロライン・クロスビーが姉妹同士で来島すると、ふたりは女性たちに家族の世話の仕方や家事を教えた。宣教師も小さな学校を作り、讃美歌をタヒチ語に翻訳した。

回復された福音を太平洋地区に広める上での次の重要な課題は、サンドイッチ諸島であった。1850年12月に10名の宣教師が、カリフォルニアの金鉱地帯から到着した。ハワイでの伝道は初めの4年間非常に進んだ。その後教えの新

鮮さがやや色あせて、伝道はゆっくり下降線をたどった。そして不幸なことに、やがてユタ戦争と呼ばれる事態が本土で進行したため、1858年には宣教師が召還された。

3年の後に、1名の宣教師が再びハワイに到着した。そして1864年を境に、ハワイの教会は未長い着実な発展期に入った。

発展の一番の旗印は、ライエの神殿建設であった。1915年の発表から1919年11月27日の献堂式まで、太平洋地区の聖徒たちは完成めざして勤勉に働いた。

何年もの間、伝道の成果はハワイが太平洋地区で一番大きかった。このハワイの発展に、オーストラリアとニュージーランドはついて行くことができなかった。1840年代の伝道に関して言えば、オーストラリアは不作の地であった。宣教師はどうか少数の改宗者を得て数支部を組織したが、彼らの働きには反対が大きくなりつきた。とった。

反対の種というのは、嘘が言い広められたこと、それに、大方は1851年のオーストラリアのゴールドラッシュに関連した問題であった。黄金熱は人々の心をことごとく冒し、金よりも永遠のことを考えようという人はまれであった。

オーストラリアでの着実な成功を阻んだもうひとつの要素がある。それはある宣教師がこう語った通りである。「私は今、福音の第一原則、つまり信仰、悔改め、バプテスマ、按手礼、権威に対する従順、シオンへの集合について教えています。」シオンに集合することで、オーストラリアを離れた新しい教会員は強められたが、オーストラリアの教会は非常に弱くなった。伝道開始後の8年間に、450人以上の聖徒がシオンに移住した。

1850年代の中頃はかなりの成功を収めたが、1858年に突然伝道が停止された。ユタ戦争のために、宣教師たちが国に呼び戻されたからである。戦争が終わると伝道活動は徐々に再開されたが、1856年から1867年までは宣教師が派遣されず、その国で伝道を行なったのはたったひとりである。伝道に力が注がれ始めたのは、1875年になってからのことで、この年に、主としてニュージーランドから14人の宣教師が送られてきた。1885年には4つの支部があり、日曜学校が2カ所で行なわれ、オーストラリア全土に21名の宣教師と178名の教会員がいた。

ニュージーランドで末日聖徒の伝道が始まったのは、1854年のことである。以来1898年に伝道部が分割されるまでは、オーストラリアとニュージーランドがひとつの伝道部として、オーストラレーシアン伝道部と呼ばれていた。ニュージーランドの教会の発展は1870年代までは遅かったが、その頃になると事務が忙しくなって、オーストラレーシアン伝道部のエライジャ・F・ピアス伝道部長は伝道本部をオ

ーストラリアからニュージーランドのクライストチャーチに移した。その後の10年間は平均9名の宣教師が両国で(主にニュージーランドで)伝道した。

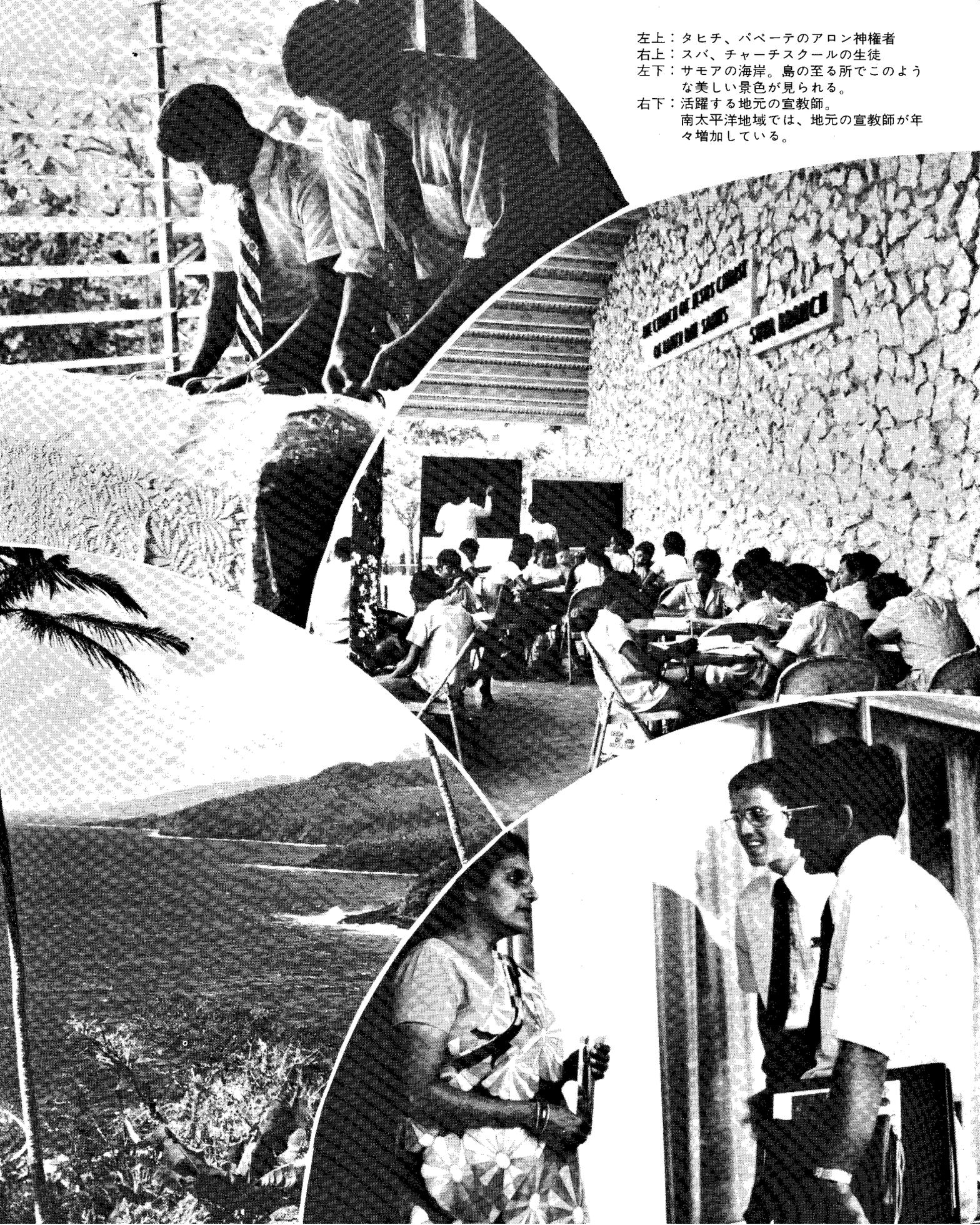
1880年代はニュージーランド伝道史の一大転換期であった。マオリの族長たちと宗教指導者たちが宣教師の到来を予言していたが、末日聖徒の長老たちの来訪で、予言はその通りに実現した。マオリの人々は予言の成就を目のあたりにして、続々と教会に加入した。1887年までに2千人余りのマオリ人が教会員となった。翌年にはなお750名増え、それ以後は数こそ少ないが着実に改宗が続いている。1880年代の改宗期を発端として、宣教師の時間はほとんど支部と教会員個人の必要に向けられるようになった。また、教会は1950年過ぎまで、主にマオリ教会として知られていた。

マオリ人の改宗が盛んなちょうどその時期に、サモアに宣教師が派遣された。すでに1862年にふたりのハワイ人長老がサモアに送られていたが、彼らの努力は全く実を結ばなかった。次に派遣された宣教師もハワイからであった。1888年6月、ジョセフ・H・ディーン夫妻が、現在アメリカンサモアと呼ばれているツツイラに到着した。まもなく別の宣教師たちも合流して、サモアでの伝道が開始された。1862年に来た宣教師のうちのひとり、マノア長老がまだ残っていて、福音を宣べ伝える新しい使者たちの手助けをした。

その後サモアからも宣教師が召され、まずトンガに送られ、次いで仏領ポリネシアで伝道を始めた。ブリガム・スムートとアルバ・バトラーが、1891年6月にサモアからトンガの首都トンガタブ島に派遣された。しかし彼らが最初の改宗者にバプテスマを施したのは、何ヵ月も経ってからのものであった。彼らとそれに続く宣教師たちが熱心に働き、小学校を建てたり、新しい宗教を広めようと各地を旅行して歩いても、トンガの人々を教会に改宗させるには至らず、宣教師たちは1897年にトンガを引き払った。しかし、長老たちは10年後に戻ってきて、ババウという北の群島で伝道を始めた。こうする内に着実な発展があり、トンガとサモアを分けた方がよいということで、1916年に両者は分割された。

ウィリアム・O・リー伝道部長はサモアでの成功に心を動かされ、大管長会から仏領ポリネシアに長老を送る許可を得た。こうして1892年1月22日、ジョセフ・W・ダムロン長老とウィリアム・A・シーグミラー長老がアピアからタヒチのパペーテにやってきた。初期の宣教師たちがやむなく改宗者のもとを去ってから40年が過ぎていたが、ダムロン長老とシーグミラー長老がパペーテに上陸したとき、教会はいまだに健在であった。しかしそこにはむずかしい

左上：タヒチ、バペーテのアロン神権者  
右上：スバ、チャーチスクールの生徒  
左下：サモアの海岸。島の至る所でこのよ  
うな美しい景色が見られる。  
右下：活躍する地元の宣教師。  
南太平洋地域では、地元の宣教師が年  
々増加している。



問題が起きていた。復元イエス・キリスト教会の宣教師が1885年にやってきて、タヒチの大勢の末日聖徒を仲間に取り入れていたのである。それらの教会員を群れに連れ戻すために、ダムロン長老とシーグミラー長老は何ヵ月も一生懸命に働いた。

この問題を聞いた大管長会は、初期の宣教師のひとりであった65歳のジェームズ・S・ブラウン兄弟を、モルモン宣教師の正統性を確立するためにタヒチへ向かわせた。彼は1892年6月1日に到着した。ブラウン兄弟の到着後何ヵ月も経ってから、仏領ポリネシアの諸島に住む末日聖徒たちはやっと、自分たちが再びまことの教会の指導下にあることを悟ったのである。特に、47年前にB・F・グロード長老が大きな業績を残したツアモツ諸島では、聖徒たちは権能を持った牧者たちがやってきたことをなかなか認めようとしなかった。しかしそれを知ったときに、盲目の老人指導者マイヘアはこう言った。「よくぞおいで下さいました。あなた方若い衆も歓迎します。今我々の心はずんではずんでいません。我々に行くべき真の道をあなた方から学ぶことができます。我々はあなた方に従います。我々は長い間、導き手を持たず、真の羊飼いがいない羊のようでした。」1893年1月に、タヒチ人の末日聖徒は425名を数えた。初期の改宗者とその子孫が中央の教会から指示も援助もなしに40年の間信仰を保ち続けたことは、初期の改宗者たちの強さを立証する大きな証である。

太平洋地区の初期伝道活動には幾多の障害があったが、1946年以降はめざましい発展を続けている。デビッド・O・マッケイ大管長が伝道活動を新たに強調し、教会の若い男女はそれに応えて大勢伝道に出た。フィジー島、クック諸島、ニューカレドニア島、ニューヘブリデス島、ソロモン諸島、ギルバート諸島、その他に伝道事業は広がっている。1950年代中頃に、フィジー島では活発な伝道活動が始まった。以来フィジーでの伝道はフィジー人とインド人が半々の国民の間に大きく発展している。(フィジー伝道部が他のオセアニア諸国と異なる点は、国民がポリネシア人ではなく、メラネシア人、インド人、ミクロネシア人を主流としていることである。)

フィジーのスパ市は伝道活動の拠点である。1950年代後半には、この地で最初の教会堂が建設された。何年も前から教会経営の小学校があり、スパを見おろす美しい山腹にはLDSフィジー工業学校が建てられ、本年(1976年)2月に完成をみた。フィジーの聖徒たちは、この学校がメラネシア全域に伝道を推し進める足がかりになるのを期待している。

フィジーはメラネシアにおける伝道活動の基であるば

かりでなく、インドへの伝道の基地ともなることであろう。この伝道部では現在10カ国語で福音を教えており、教会出版物は6カ国語に翻訳されている。その中には重要なインド語であるヒンズー語が含まれている。将来インドに召される宣教師にとって、教える国民の言語で聖典や教会出版物があることは大きな助けである。フィジーのインド人聖徒たちの中から、いつの日かインドへ福音を携えて行く宣教師が出ることであろう。

太平洋地区のステーキ部や伝道部では、地元の青年たちが自国で伝道する準備をしている。教会員にはほとんど知られていないが、現在彼らはサモアとトンガとフィジーにおける伝道活動の大半を担っている。サモアとトンガの伝道部長は改宗者であり、ステーキ部長の経験もある地元の兄弟たちである。仏領ポリネシアの伝道部長はフランス生まれながらタヒチに住みついて久しい兄弟である。ニュージーランド・オークランド伝道部の伝道部長は、マオリ人との混血のニュージーランド人である。その他、太平洋およびオーストラリアの伝道部長や地区代表も地元の聖徒たちである。

この地域に強力な教会指導者を育てた最も大きな要因は、教会の教育制度である。太平洋諸島の末日聖徒による最初の教育事業は、ルイーザ・B・ブラット姉妹が娘たちと島の子供たちを集めて教えたことであった。1886年には、宣教師がニュージーランドのマオリ人子弟のために学校を開いた。次の世紀を迎える頃には、そのような学校が10に増えていた。トンガ初の教会学校は1895年に開校した。それらの学校はニュージーランドの学校と同じようにごく小規模でささやかなものであった。教科は読み書きと算数に限られた。サモアにも伝道部が組織されてすぐ、同様の学校が建てられた。1922年には20の学校に665名の生徒が在籍し、11名のパアランギ(白人)と27名のサモア人教師がいた。

サモアの聖徒は20世紀初めに、集合地としてふたつの村落農園を開拓した。ウボル島のサウニアツとツツイラ島のマブサガである。これらの村の学校は有名であった。サウニアツの聖徒たちにとってとりわけ大切なのは、村の学校のプラスバンドであった。デビッド・O・マッケイ大管長と同行のヒュー・J・キャノン長老が1921年来島した折、彼らを歓迎したのはこのプラスバンドである。サモアのアメリカ領事も大切な行事にはこのプラスバンドを呼んだ。サモア、ニュージーランド、タヒチの各所で、これに似たプラスバンドが結成されている。

フィジー、サモア、トンガ、仏領ポリネシアでは、今も小学校が教会の発展に大きく寄与している。教会は島々に高校のモデル校も数校作った。初めの2校は、教会の既

成学校制度の枠外で設立され、運営されている。ニュージーランドのヘースチングに近いマオリ農業大学（M A C）は1913年の創立で、1931年までニュージーランド人に貢献してきた。しかし、大地震により、再興不可能なまでに破壊されてしまった。その教科課程はアメリカの高校と似ているが、農業、工芸、その他の実技に重点が置かれた。登録者数は年間90名を越えることはなかったが、この学校の出身者はニュージーランドの教会で素晴らしい指導者となっている。マオリ人と共にサモア人、トンガ人、タヒチ人もM A Cに学んだため、その影響は南太平洋各地に及んでいる。

M A Cの出身者たちが強力な推進者となって、1958年ニュージーランドのチャーチカレッジが創設された。

トンガやサモアでは、宣教師と教会指導者がほかにも高校を創立した。1924年8月にトンガ伝道部のM・バーノン・クムズ伝道部長は、9.5エーカーの土地を農園と付設学校用地に借りた。この土地は「目をさまして立て」という意味のマケケと呼ばれた。ここに高校が建てられ、学生はほとんどの食料を自給しながら正規の学業に励んだ。マケケ高校は1926年2月、M A Cの卒業生サミュエル・V・ファクトウを教師に正式に開校し、20年余り続いた。

1952年2月には新たにリアホナ高校というトンガ人の高校が設立された。また、小学校の制度が大規模に拡張され、1975年後半には北トンガのババウ島中学校が新設された。

サモアでは、3つの教会学校が特に重要である。1974年にアメリカ政府に売却されたマブサガ校と、サバイ島にあるピオラ校、ウボル島アピアにあるベセガ校である。

太平洋諸島にある教会学校の意義は、将来の世代が感じることであろう。1972年の末には、太平洋諸島の教会の小、中学校に総計5,100名余りの生徒が在学していた。

リアホナ高校の建設プロジェクトには、暫定的ではあるが新しい教会方式が採用された。それは「建築宣教師」制度である。トンガ伝道部長は、腕の良い労働者を捜すのが困難なために、トンガ人青年を労働伝道に召すことにしたのである。

リアホナ高校のこのプロジェクトを皮切りに、数多くの支部に新しく美しい教会堂が建つことになった。またこれは、大勢の若人にとって職業訓練ともなった。教会は現在ではこの制度を廃止した。しかし、この制度によって技能を身につけた人々の家族は、今や快適な生活を送っている。

太平洋全域に建築宣教師制度によって教会堂が建つと共に、ニュージーランドには神殿も建設された。この地に建った神殿は、教会が個々の改宗者や家族の段階を越え、支部や地方部の段階も越えて、シオンのステーク部のように、

ことごとく地元へ責任を課せられるほどに発展したことを象徴している。マッケイ大管長が1955年にニュージーランド神殿の建築計画を発表したとき、ニュージーランドにはステーク部がひとつもなかった。アリエル・S・ポリフ伝道部長と地元の地方部指導者は、できるだけ早くステーク部を組織するため全力を尽くそうと決意した。評議会が組織され、訓練コースが行なわれ、支部や地方部の責任からできるだけ宣教師をはずし、ステーク部の責任が担えるように、霊的な準備に一層の力を注いだ。ニュージーランド神殿は1958年4月20日に献堂されたが、それより1ヵ月遅れて、オークランドステーク部が組織された。それは、北米およびハワイ外で初めてのステーク部である。

太平洋の他の地方でも同様の発展があった。1960年3月にはオーストラリアに最初のステーク部が誕生し、1962年にはサモアで初めてのステーク部が、そして1968年9月にはトンガ初のステーク部、1972年3月にはタヒチステーク部が発足した。現在、南太平洋に28のステーク部がある。西サモアとアメリカンサモアは、全土がステーク部に包含された世界で初めての国である。

ステーク部発展のひとつの要因は、1950年代に全地区の伝道部長が決めた、宣教師は全時間を伝道できるように支部や地方部の責任からははずすという申し合わせであった。結果として、地元の教会員が前面に立ってみ業を行ない、宣教師は新しい改宗者捜しに専念できた。

海の島々の国民は、大管長会と教会幹部を深く愛し、尊敬している。1921年のデビッド・O・マッケイ長老、そして1938年のジョージ・アルバート・スミス長老などの十二使徒の来訪が、神聖な特別な機会として、各伝道部の歴史に今なお生きているのである。マシュー・カウリー長老はポリネシア人をこよなく愛し、ポリネシア人からも深く慕われた。1950年以降の教会幹部の訪問は、その数が大幅に増したために一つ一つここに述べることはできないが、海の島々の民は訪客の勧迎を以前と変わらぬ喜びとしている。

主はこの地の民を愛し、立派な主の僕たちを絶えず送り、教会堂や学校などの多くの施設を恵み、主イエス・キリストへの信仰を祝福してこられた。アブラハムの祝福にあずかるこれらの民は、日に日に神の王国に座を占めている。



R・レニエル・ブリッチ：ブリガム・ヤング大学歴史およびアジア研究准教授。オーレム・ユタ・シャロンステーク部第二副ステーク部長

# 日々の恵み

以下の4篇の実話は、R・レニエルおよび  
ジョアン・M・ブリッチの執筆による。

「夢を見ました。  
あなた方おふたりが、この子  
に油を注いで下さったのです。」

1889年11月、エドワード・J・ウッド長老とジョセフ・  
H・ディーン伝道部長は、サモアのとあるバンヤン樹の葉  
蔭で、導きを求めて主に祈った。ひとりの子供が病気で、  
その母親が長老たちを夢に見て、ぜひ赤ん坊を癒してほし  
いと彼らに来島を請うたのである。しかし宣教師たちは慎  
重だった。国情が不安定で、モルモンの立場も定まらない  
ため、わなかかもしれないと恐れたのである。

その祈りの最中に、ウッド長老は行くようにというささ

やきを聞いた。それこそ長老たちが求めていた答えであっ  
た。彼らはすぐに出発した。到着すると、岸辺でずっと待  
っていた母親が彼らをうやうやしく迎え、ついて来るよう  
にという身振りでファレ（家）に案内した。

「ようこそおいで下さいました。」彼女は言った。「こ  
れでもう大丈夫です。これが子供です。」

彼女は小屋の床に寝かされている子供の体にかけて白い  
シーツをめくり上げた。長老たちは子供は死んでいると言  
った。しかし、母親は生きていと言い張った。「私が昨  
晩夢に見たことを行なって下されば、子供はよくなります。  
夢で見たあのことをする力をお持ちでしょう？ あなた方  
おふたりは、この子に油を注いで、この子の頭に両手をお  
かけました。」

それを聞いた長老たちに、もはやためらいはなかった。  
彼らはその権能を持っていたのである。彼らは子供に癒し  
の儀式を施し、布でその子をおおって、その場を立ち去っ  
た。

それからの2年間、ウッド長老はその子と母親のことに  
ついて何も消息を聞かなかった。そしてそのまま別の島に  
召されて行った。すると驚いたことに、彼はひとりの女性  
から丁寧な出迎えを受けた。彼女はウッド長老の名前を知  
っていた。彼女はわきに9歳位の少女を呼び寄せると、群  
衆に向かって話し始めた。

「この子は、福音の素晴らしい力と、ウッドさんたちが

「それを聞いた長老たちに、もはやためらいはなかった。彼らはその権能を持っていたので  
ある。彼らは子供に癒しの儀式を施し、布でその子をおおって、その場を立ち去った。」



持っていらっしやった力と権能の生きた証です。ウッドさんたちは2年も前にこの子に癒しの儀式を施して下さいました。それ以来ウッドさんたちにはお会いしていません。でも、この方々が神様の力を持っていらっしやることを、私はよく知っています。皆さんは、この方々のお話を必ず聞かなければいけません。」

主のみ業は急速に広まり、短期間の内にそこで支部が組織され、教会員が100名を超えた。



(1889年11月、ウッド氏の日記より：およびトーマス・C・ロムニー *The Gospel in Action* 「福音の実践」P. 262, 263)

## 「一体、 どういう理由で？」

マーク・ハフナー長老と同僚のディーン・ラスムセン長老は、フィージーのスバ市のはずれの通りに立って、次はどこへ行こうかと話し合っていた。ふたりは、アミ・ペテロ姉妹が通りの向こうに住んでいることを知らなかった。ところが、姉妹が通りに立っている長老たちを見つけ、家に呼んでくれた。芝生で立ち話をしていると、姉妹が言った。「家に入って夫に伝道のレッスンを教えて下さいませんか。もうそろそろ、話を聞くと思いますから。」

アミはトニー・ペテロと結婚して以来、彼がいつか宣教師の話聞いて教会に入るようにとずっと祈り続けていた。けれども、トニーはこれまで一度も話を聞こうと言わなかった。長老たちはこのことを知らなかった。この日アミは、トニーから教会のことをちょっとほめられたので、それに勇気を得て、長老たちを呼んだのだった。

1973年11月の晩のそのレッスンを、長老たちはよかったと感じた。トニーはレッスンを受け、幾つか質問もした。長老たちにもなじんでくれて、話に興味を持った様子だった。レッスンが終わると、彼はもう一度会うのを承知してくれた。

ところがその夜、長老たちが帰ってから、トニーは妻に荒い口調で言った。「アミ、一体どういう理由で宣教師を連れてきたんだ。君の教会に関心のないことは知ってるだろう。」しかしもう次の集會を約束してしまったので、レッスンを続けたくはなかったが、礼を尽くして、長老たちに来てもらうことにした。

しかし再び教会の教えを聞いたとき、彼はこの福音は真実であるという証を得た。そしてわずか1ヵ月後にバプテスマを受けたのである。彼が福音を受け入れたことと、またたくまに進歩を遂げたことに、妻も長老たちもただ驚くばかりであった。

トニーは宣教師のレッスンを終えた後、最初のレッスンを受ける前に経験したことを妻と長老たちに話した。何週間か前に、ふたりの青年に会ってある本の話聞く夢を見たというのである。彼は目がさめても、その夢にどういう意味があるのかわからなかった。また、別に何の下心もなく妻にちょっとしたほめ言葉を言ったところそれに力を得た姉妹が長老たちを呼んだのであった。長老たちから初めてレッスンを受けてモルモン経の説明を聞いたトニーは、彼らが夢で話をした青年であることに気づいた。トニーは宣教師たちに逆らう態度を取り、彼らを呼んだことで妻を叱ったが、そのレッスンが終わる前から自分がこの回復された福音の教えを聞くことになるだろうと思っていたというのである。

彼はバプテスマの水に入るまでに、幾度か試しに遭った。お茶もウイスキーも彼の好物である。しかもクリスマスシーズンには会社でパーティーがあり、それには酒がつきものである。トニーはパーティーに行った後に、知恵の言葉を守る生活に入ればよいのではないかと思った。しかしスバの地方部長はトニーの所に来て、一度に思いきってやめるのが一番だと説明した。トニーはそれに納得し、その通りに実行した。

教会に入る前のトニーは、これといって人生に目的を持たない気ままな人間であった。勤め先の銀行では、まじめとも、きちょうめんとも認められてはいなかった。しかし人生の本当の目的を知ってから、トニーはなすべき大切な仕事があるという自覚に目覚め、もっと働かなければと考えた。教会に入ってから、彼は一生懸命に働き、責任を立派に果たすようになった。そして、バプテスマからわずか2ヵ月後に、役員に昇進したのである。

長老たちからレッスンで家族の大切さを学んだトニーとアミは、バプテスマを受ける前から、できるだけ早く神殿へ行って家族の結び固めを受けようと決心していた。やがて、フィージー伝道部では1975年1月にニュージーランドの第1回の神殿訪問を計画していることが知らされた。

旅費を貯めるには犠牲が必要だった。彼らは1974年の初めに、それまでの家からもっと小さくて安い家に引っ越した。そのほかにもいろいろやりくりしてお金を貯め、バプテスマを受けてから1年と2週間後に、夫妻とふたりの子供は今も永遠にわたっても家族として結び固められたのである。

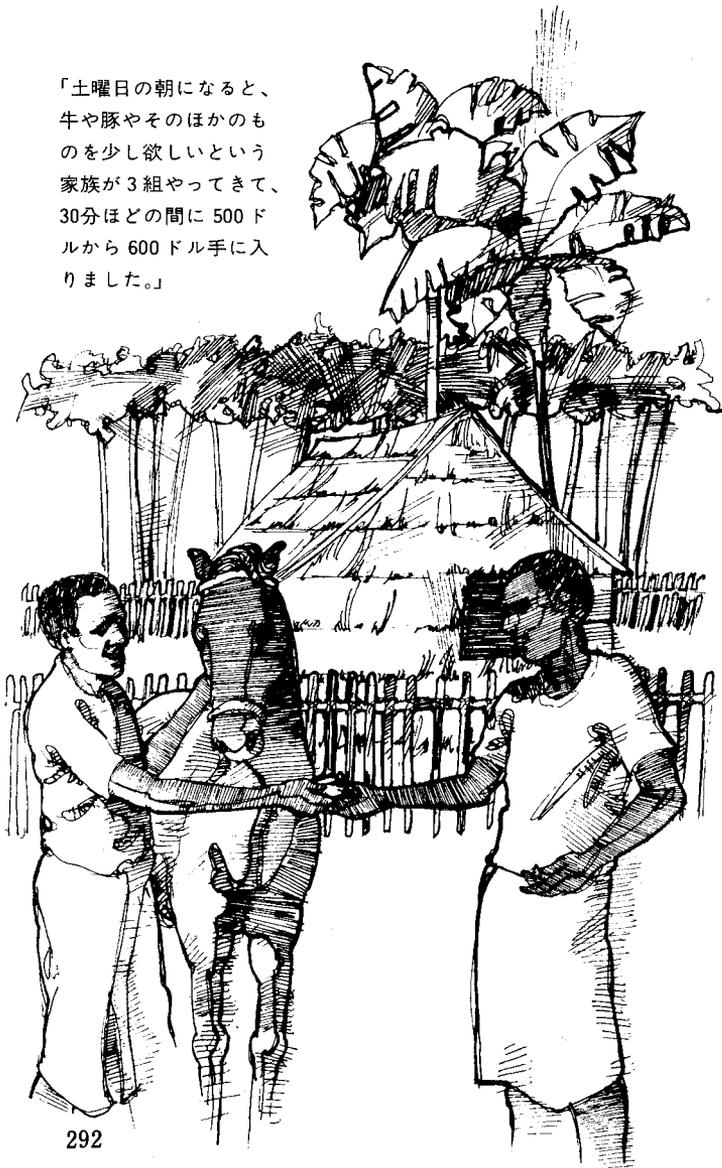
現在トニーは、スバ地方部評議員会の一員である。アロン神権ディレクターの責任を受け、フィージー伝道部で初めてのユースコンファレンスを立派に行なった。彼は今、「教会学校制度」のもとで、スバLDS小学校と現在建設中のLDS工業学校の財政検査官をしている。

## 神殿をめざして、月に70セントで生活しました

「目標を達成するためには、とにかく何かをしなければならなかったのです。」 バハイ・トンガ兄弟はあっさりと言った。トンガ夫妻は是が非でもニュージーランド神殿の献堂式に行きたかった。けれども、トンガの聖徒たちにとって、そのための旅費を貯めることは容易ではなかった。彼らは何ヵ月間も準備し、貯金した。そして、ついにお金は集まり、計画ができた。

しかし、主の教会にはまだ必要なことがあった。フレッド・ストーン伝道部長からトンガ家族に要請があった。「トンガ兄弟、あなた方が神殿費用として貯めたお金を全額、私に渡していただけませんか。あなた方の支部に教会堂を建てたいのです。そのお金がなければ建築計画は取りやめになり、あと数年は待たなければなりません。」

「土曜日の朝になると、牛や豚やそのほかのものを少し欲しいという家族が3組やってきて、30分ほどの間に500ドルから600ドル手に入りました。」



「はい、さしあげます。明日、お金を持ってきます。」 バハイ・トンガ兄弟はそう返事した。しかし、新しい神殿を見たいという夢はなかなか捨てられなかった。ストーン伝道部長が帰ってからのことを、トンガ兄弟はこう話している。「妻とそのことを話し合いました。妻は、『いいわ。全額献金しましょう。でも、私は友だちと家族に、神殿の献堂式に行くって話したんですからね』と言うんです。そのときに、促されるようにして自分が言ったこと、あれはどうしても忘れられません。こう言ったんです。『戸を閉めてサタンを入れないようにしましょう。私たちは主のおっしゃることをするんだ』と。」

水曜日の朝、私は政府の銀行に行って貯金を全部おろしてきました。そして妻に渡し、ストーン伝道部長に渡すようにと言いました。

その晩ふたりで少し話し合いました。『アミ、主は指導者たちを通して、戒めを守れば献堂式に行けるように道を備えて下さると約束された。家には牛も豚も馬も家具もマットもある。それをみんな売ろう。そうしたら献堂式の祝福が受けられる。』

家畜を売りたいと言うと、みんなはやって来ましたが、『いや、高すぎる。高くても買えないよ』と言うんです。それが木曜日で、金曜日も売れませんでした。次の月曜日には神殿行きの船が出港するのです。

土曜日の朝になると、牛や豚やそのほかのものを少し欲しいという家族が3組やってきて、30分ほどの間に500ドルから600ドルほど手に入りました。それで妻に、行くお金ができたと言いました。

月曜日の朝早く、ヌクアロハに行ってストーン伝道部長にお金を渡すと、彼は驚いて、『このお金はどこから?』と聞きました。

『献堂式に行けるように、持ち物を少し売ったんです』と答えると、彼は『トンガ兄弟、主はあなた方を祝福されますよ』と言いました。

私たちは神殿でたくさんの祝福を受けました。ニュージーランド神殿で最初の証人になり、一番に結び固めを受けました。トンガ人コーラスの指導をしていたので、マッケイ大管長から献堂式の閉会の讃美歌の指揮もさせていただきました。

妻と互いに結び固められたとき、本当に胸を打たれました。子供たちは一緒ではありませんでした。そのことで、涙が出て仕方ありませんでした。私たちは家に帰ると、4人の子供たちに、手伝ってくればみんなで一緒に神殿に行けるよと約束しました。私は心の中で、『神殿で子供たちに結び固められなければ、いい子になるようになどどうして言えるだろうか』と思いました。子供たちは自分のものでないという気持ちがしていたのです。

それから2年間、私たちはありとあらゆるものをきりつめました。学校からもらう給料を分けて、半分をそっくり貯金しました。けれども什分の一や断食献金は納めました。毎月手元に残るのは70セントでした。それで、月に70セン

(301ページに続く)



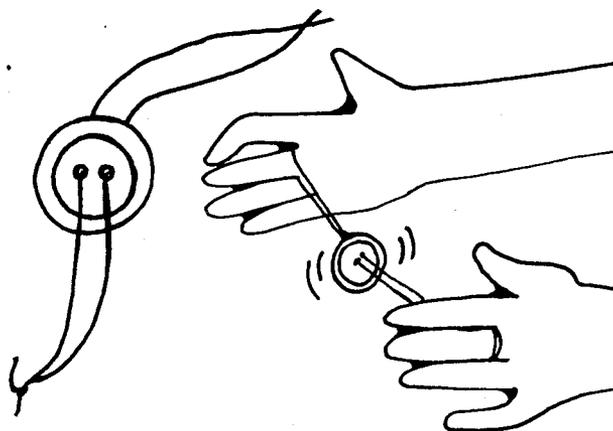
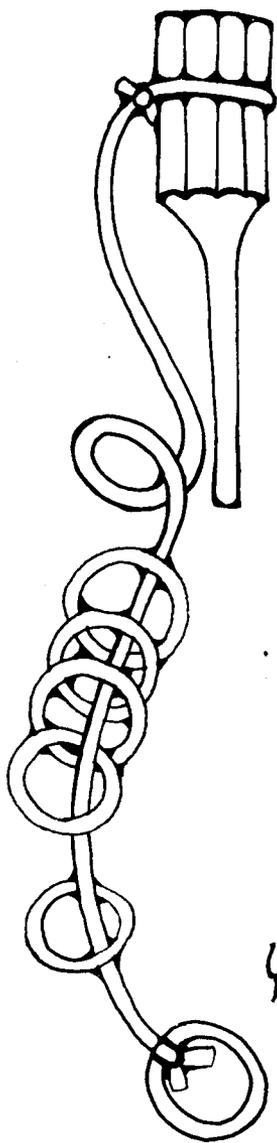
## 自分で作るおもちゃ

### ひとりわなげ

用意するもの：ナイフ、ちよっけい4センチくらいのぼう、たこ糸1メートル、ちよっけい5～6センチの「わ」6こ

#### 作り方

1. 「わ」はなんで作ってもかまいません。たけなどを、わ切りにすると、かんたんになります。
2. ぼうの、かた方のはしをけずって、図のように、だんだん細くします。
3. たこ糸のはしを、ぼうの太い方にむすびつけます。たこ糸がぼうからぬけてしまうことがないように、ぼうにみぞをほっておくとよいでしょう。5つの「わ」をたこ糸に通し、ひとつの「わ」をたこ糸のもう一方のはしに、むすびます。
4. ぼうの太い方をにぎり、たこ糸に通した「わ」をいきおいよくほうり上げて、ぼうに「わ」をうけとめてあそびます。

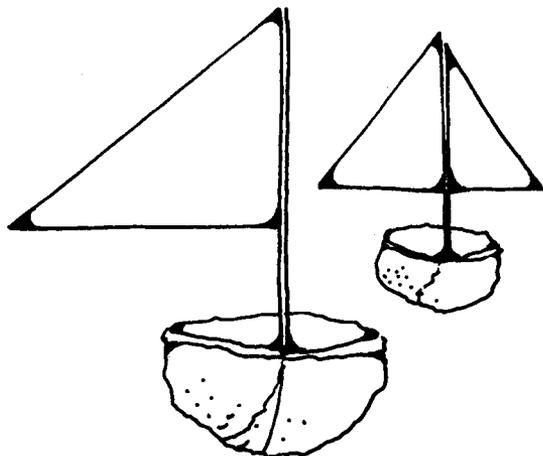


### クルミのふね

用意するもの：半分にわったクルミ、ろう、つまようじ、紙、はさみ

#### 作り方

1. ろうをとかし、半分にわったクルミにながしこみます。
2. 紙をてきとうな大きさの三角形に切り、つまようじにはりつけます。これが、ふねのほになります。
3. ほができたなら、クルミにながしこんだろうにさして、できあがり。



### ブンブンボタン

用意するもの：ふたつあなのボタン2コ、40～50センチの糸2本

#### 作り方

1. ボタンのあなに、糸を1本ずつ通し、両はしを図のようにむすびます。
2. 両はしを中指にかけて、ボタンをほうりなげるようにして、くるくるまわすと、糸がねじれます。両手をちかづけたり、とおざけたりすると、糸がゴムのようにのびちぢみして見えます。

# ヒラマンと二千人のゆうしゃ

(アルマ53～56しょう)

ながいあいだ、せんそうがつづいていました。レーマン人が、なんどもなんども、あちらからこちらからせめてきました。大ぜいの人々がけがをし、しんでいきました。その上、せいじのもんだいをめぐって、ニーファイ人の中でも、あらそいがおこっていました。

そんなニーファイ人の中に、アンモンのたみとよばれる、こころのきよい人々がすんでいました。アンモンのたみは、むかしレーマン人でしたが、アンモンからかみさまのおしえをきいて、こころからくいあらため、ニーファイ人のとちでくらしていました。アンモンのたみは、ニーファイ人たちがくるしむのをみて、なんとかしたいとおもいました。でも、かいしゅうしたとき天のお父さまに、二どと人をころさないと、かたくやくそくしていたので、せんそうにいくことはできませんでした。でも、せんそうにいてもさしつかえのないわかもの

たちは、よげんしゃヒラマンに、せんそうにつれていってくださいと、たのみました。お父さんやお母さんのために、たたかおうとかんがえたのです。そのようなわかものは、ぜんぶで二千人いました。

二千人のわかものたちは、せんじょうで、いさましくたたかいました。それまで、一どもせんそうにいったことはありませんでしたが、しぬことをおそれたりはしませんでした。わかものたちにとって、お父さんやお母さんのじゆうは、いのちよりもたいせつだったのです。大ぜいのわかものが、けがをしてたおれました。しかし、しんだものはひとりもいませんでした。わかものたちは、お母さんから、天のお父さまをふかくしんじていれば、かならずすぐわれるとおしえられていたのです。

よげんしゃヒラマンは、わかものたちのしんこうを、ことばをつくしてほめたたえました。



「お母さん、またおてつだいにいくの。」  
リベカはききました。「きょうはだれのと  
ころ？ なぜいつも、お母さんが行かなく  
ちゃならないの。ほかの人にかわってもら  
ったらいいいじゃないの。」

お母さんは、しずかにほほえんでいま  
した。「ほかの人も、みんな行くのよ。る  
すのあいだ、アンナをおねがいね。」

「ええっ？ アンナもおいていくの。わ  
たし、ナオミとあそぶやくそくをしたのに。」  
リベカは、ふくれつつらをして、ふへいを  
いいました。そして心の中でおもいました。

「ふこうへいだわ。ほかの子は、みんなあ

そんでいるのに。」 リベカは、その日一日  
いやいやながら、アンナのおもりをしてす  
ごしました。

お母さんは、夕がたおそくかえってきて、  
いいました。「あした麦ばたけで、おちぼ  
ひろいがあるんですって。おばあちゃんが



アンナのおもりにきてくれるから、いっしょに行きましょうね。」

「おちぼひろいですって？」リベカは、けさよりももっとふくれっつらをしていました。「なんでわたしたちが、そんなこじきみみたいなことをしなくちゃいけないの。わたしたち、そんなにまずしくないでしょ。」

## だれかのために



う。」

お母さんは、じっとリベカの目を見ていました。「ええ、たしかにわたしたちは、まずしくありません。でも、よくおききなさい、リベカちゃん。わたしたちにも、そうしなくちゃならないときが、くるかもしれないのよ。女の子はね、いろいろなことを、まなんでおかなくちゃいけないの。」

お母さんのいうことは、わからなくはありませんでした。でも、おちぼひろいなんか、いやでいやでたまりませんでした。おかげで、またもやナオミとあそべなくなったのです。しかたなく、ナオミをおちぼひろいにさそうと、ナオミは見くだしたようにこういいました「ふん、わたしのうち、お金もちなのよ。わたしをおちぼひろいにさそうなんて、あんた、どうかしているんじゃないの。」リベカは、まっ赤になりました。『お母さんったら、わたしがどんなおもいをしているのか、ぜんぜんわかってくれないんだから。』こころの中でそういつて、くちびるをかみました。

つぎの日、夜があけないうちに、おばあちゃんがやってきました。リベカは、お母さんといっしょにでかけました。むねの中は、くやしさとほらだたしきで、いっぱい

でした。かごをもって歩くときも、ずっと目をふせていました。

麦ばたけにつくと、リベカはお母さんに、おちぼのひろいかたを、おしえてもらいました。しぶしぶ、おちぼをひろいはじめました。少したつと、もうせなかがいたくなりました。

のびをしようとして、せなかをのばすと、リベカは今まで見たこともないような、こうけいを見ました。大ぜいのまずしい人々が、手に手にかごをもって、いっしょうけんめい、おちぼをひろっているのです。たすけなければいけない人たちが、こんなに大ぜいいるなんて、リベカはかんがえたこともありませんでした。すぐちかくに、リベカと同じくらいの女の子がいました。リベカのむねは、きゅっと、しめつけられるようでした。『はやく、たくさんおちぼをひろおう。たくさんひろったら、お母さんは、あの子にわけてあげてもいいって、いうかもしれないわ。』

「わたし、おそいでしょ。おちぼひろいは、はじめてなの。」 リベカは女の子にはなしかけました。

「すぐ、じょうずになるわ。」

「もう、ずっと来ているの？」

「ええ、お父さんが牛のつのでつかれて、はたらけなくなってから、まい年ね。」

リベカは、女の子といっしょに、いっしょうけんめいおちぼをひろいました。そして、おひるになると、女の子にいいました。

「いっしょに、おべんとうをたべましょう。」

「ええ、でも、弟がいるから……。」

「いっしょに、つれていらっしゃいよ。わけてたべればいいわ。」

まん中におべんとうをおいて、みんなでたべました。リベカは、少ししかたべませんでした。女の子と、その弟に、たくさんたべさせてあげたかったからでした。

リベカは、そっとお母さんにききました。「わたしのおちぼ、あの子にわけてあげてもいい？」

お母さんは、リベカのかたをだいて、いいました。「うれしいわ、よく気づいてくれたわね。」

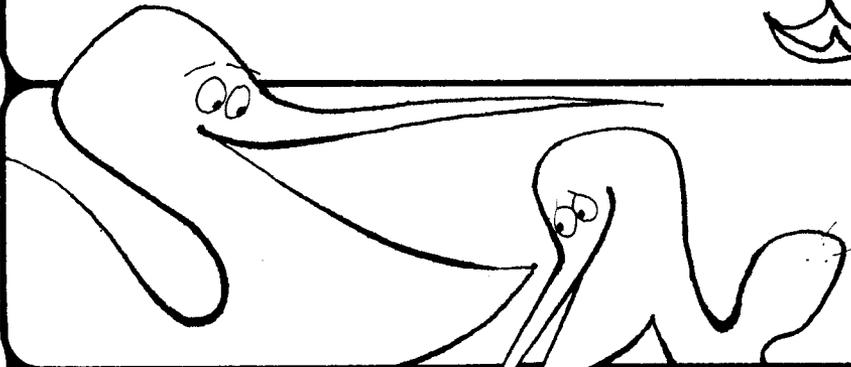
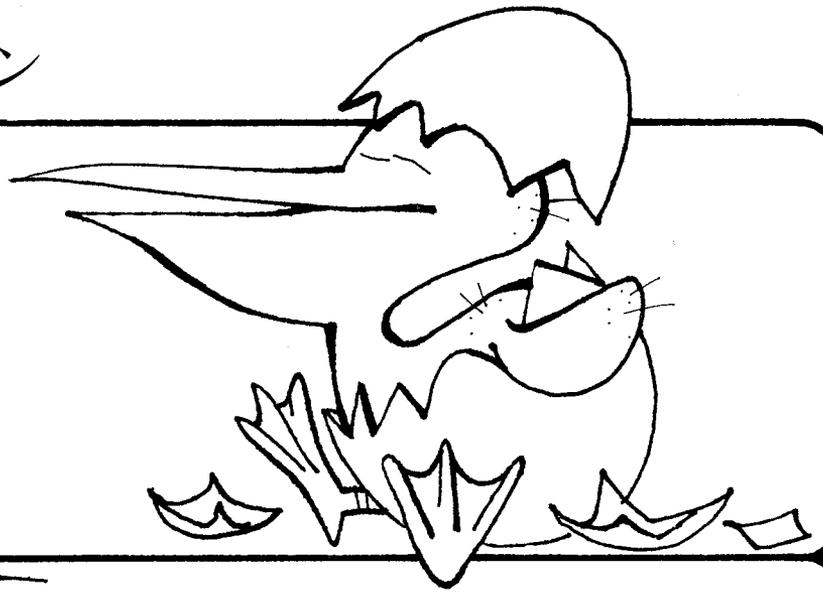
「もっとはやく、気づかなくちゃいけなかったのね。」

リベカの目にも、お母さんの目にも、なみだがひとつぶ、ひかっていた。だれかのためにはたらくこと、それは、とてもたのしいことでした。

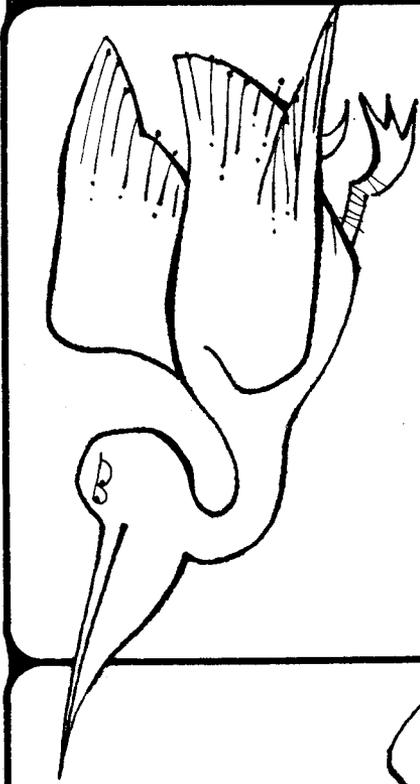


# あかちゃんペリカン

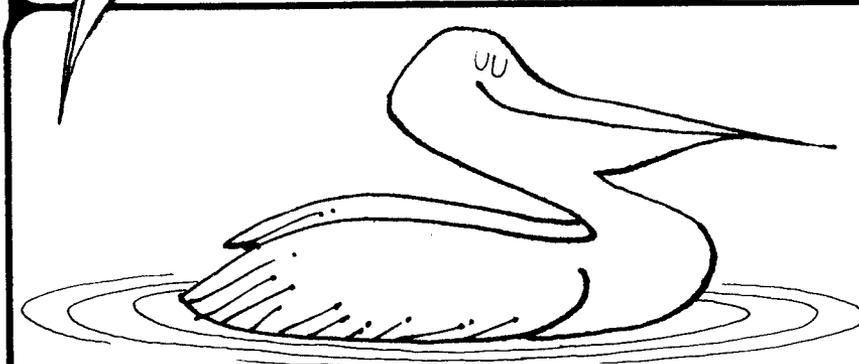
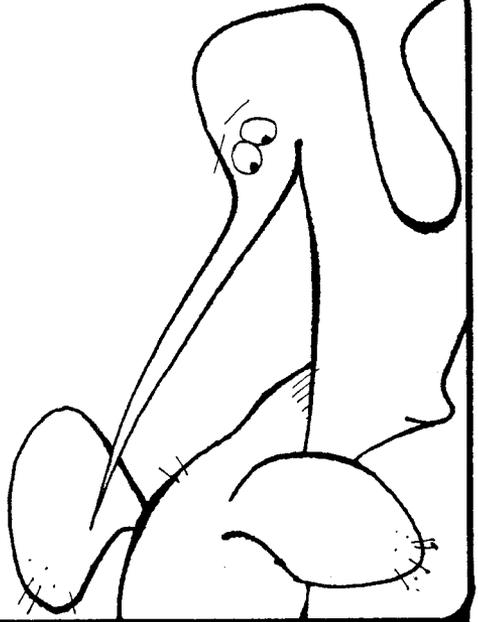
コツコツ、ペリカンのたまごが、へんなおとを、たてています。あれっ、くちばしがみえます。ペリカンのひなが、かえったのです。まだ、めがみえません。はねも、はえていません。でも、おなかはペコペコです。



ペリカンのおかあさんは、さかなをつかまえて、あかちゃんペリカンのところへ、はこんできます。

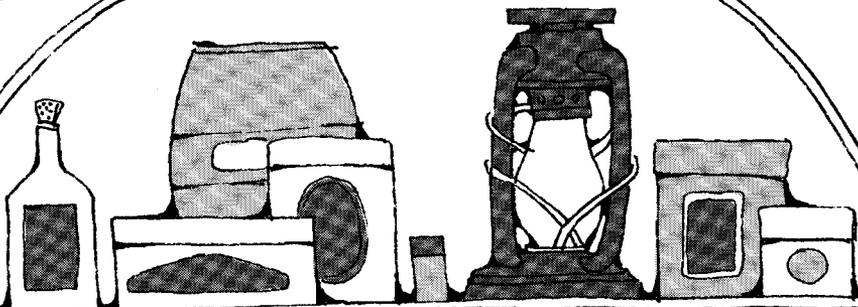


ペリカンのおかあさんは、さかなをつかまえるのが、とてもじょうずです。そらたかくまいあがり、くちばしをしたにむけて、ジェットきのように、水につっこみます。バシャン！ とみずおとをたてたとおもったら、もう、さかなをつかまえています。そして、くちばしをしたについた、おおきなふくろに、さかなをいれて、はこんできます。おかあさんペリカンが、おおきなくちをあけると、あかちゃんペリカンは、そこにあたまをつっこんで、さかなをたべます。



2かげつぐらいたつと、はねがはえてきて、およげるようになります。これからは、じぶんでとんで、じぶんでおよいで、じぶんでさかなをつかまえるのです。りっぱな、おとなのペリカンになるひも、もう、まちかです。

# かいたくしゃの ほろばしゃ



7  
9  
8  
11  
12

5  
6  
4

3  
2

てんをむすんでみましょ  
う。40年もかかってかんせ  
いした、すばらしいたても  
のになりますよ。  
答：ソルトレークしんでん

20  
22  
24  
25

18  
21  
23

19  
16  
17



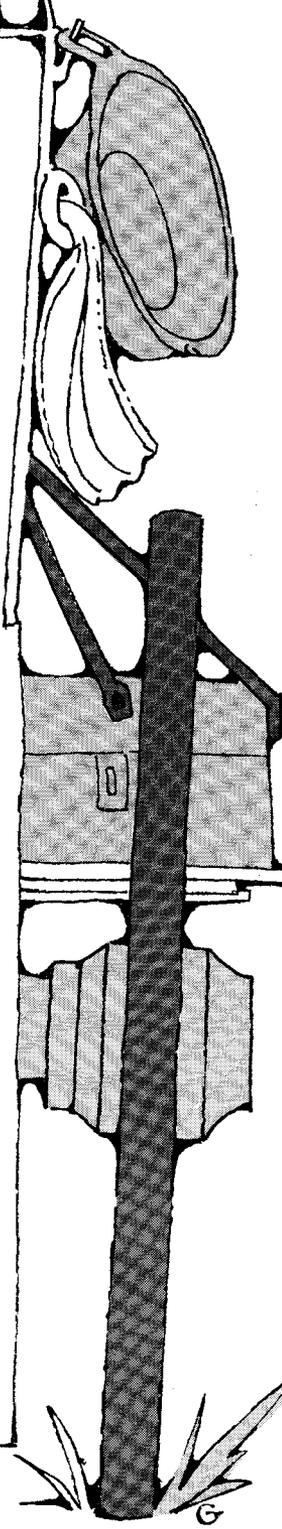
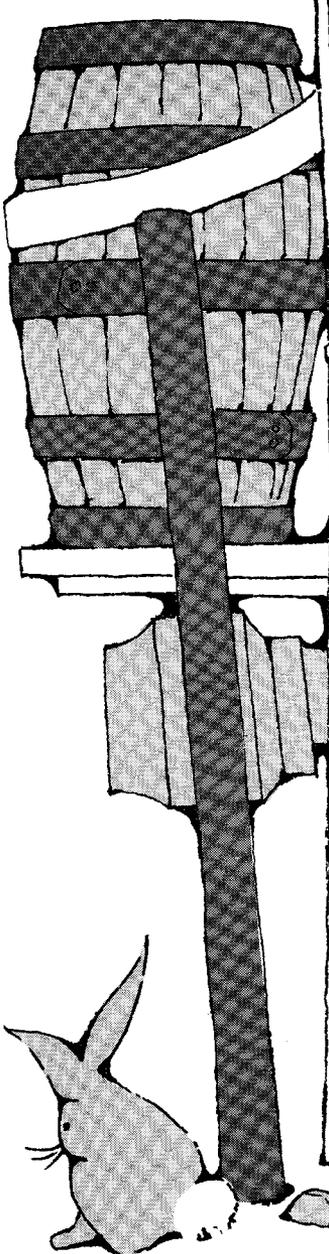
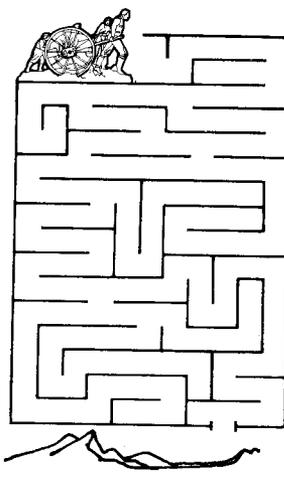
13

てんのあるところだけ、いろをぬっ  
てみましょう。アメリカのせいぶにい  
るどうぶつができます。



14

さあ、ソルトレーク  
ぼんちまで、いけるか  
な。



(292ページから続く)

トで2年間暮らしました。家庭で栽培したものや集めてきたものを食べました。妻が早く起きてバナナやココナツミルクでサラダを作っていたのを覚えています。子供たちは神殿費用を貯めるために、お菓子や靴は買えませんし、映画も見られませんでした。

私はリアホナ高校で教える仕事以外に、いろいろな仕事をしました。交通費を節約するために、ヌクアロハの地方部集会には11キロの道を自転車で出かけました。伝道部MIAの副会長をしていたので、各地の支部を訪問しましたが、それも自転車でした。地方部の集会はたいてい午前6時に始まるので、早朝に家を出ました。

旅費作りの最終日がやってくると、5歳の娘が『パパ、私かぞえてくる』と言って、お金を勘定してから、『貯まったわ。神殿に行けるわよ』と言うんです。それより大きいふたりの息子は、235ドル貯まったと言いました。2年で娘は65ドル貯めていました。私には1,300ドルほど貯金がありました。

このような犠牲によって、私たちは家族一緒にニュージーランドに行って、神殿で結び固めを受けました。私たちは目標を達成するために何かをしなければならなかったのですが、それも私たちにとっては本当に大きな祝福でした。

## 知恵の言葉 の恵み

アーネスト・C・ロシター伝道部長夫妻は、タヒチから3日の船旅をしてタカロア港に入ったとき、島のココナツの木が黄色になって葉がだらりと垂れているのが気がかりでならなかった。翌朝になって、彼らはそれが島民たちの憂慮の種であることを知った。評議会で、村人たちはロシター伝道部長にその問題を持ちかけた。

村の長が威厳を込めて伝道部長を土地の名で呼び、こう言った。「エレネタ、何ヵ月も何ヵ月も、我々は白人商人からの借金を返すために頑張ってきました。だが、主は我々に恵みを下さりませんでした。ココナツの木が胴枯れ病になって、葉がしなび、熟さないうちに実が落ちてしまうのです。商人からは、借りた金を返さないと農園を差し押さえるとおどされています。毎年季節になると真珠取りをしますが、そうしたところで商人たちへの返済には追いつかないのです。我々の財産を守るには、あなたの助けが必要です。」

ロシター伝道部長は心を深く痛めて、島民の借金の問題について考える時間をもらい、3日間断食と祈りをした。調べてみると意外な事実がわかった。村人たちは知恵の言

葉を守らず、什分の一も断食献金も納めず、神権を軽んじていたのである。

断食の最終日の午後、ロシター伝道部長は聖徒たち全員を召集した。島の集会所で、主の力が伝道部長に下った。そして彼は力強く事実を明かし、民に悔改めを叫んだ。彼は、民が主のみ前にへりくだり、戒めをすべて守ったならば、主の祝福が与えられて農園は緑を取り戻し、実は豊かに結ぶと告げた。

それからロシター伝道部長は、借金返済の援助に動き始めた。彼はタヒチに戻り、長い説得の末に、真珠取りの時期に島民が使う一隻の船と用具を借りた。そして船をタカロアにまわし、そこで村人たちは家畜や持ち物を携えて船に乗り込み、別の島の真珠取りの基地へ移った。

その島で、人々はロシター伝道部長の指導の下に家を建て、厳しい衛生習慣を身につけ、長時間に及ぶ難儀な真珠取りの仕事を開始した。人々は前にもまして儉約し、これまでになく勤勉に長時間働いたので、季節の終りには島のほかの人たちよりも75パーセントも多く貝が採れたのである。ところが民の結束と成功をねたむ商人たちがおり、結託して真珠貝の値を下げた。彼らは別の人々には1ポンドにつき20セントを払いながら、ロシター伝道部長たちにはポンドでわずか15セントだと言い出したのである。

しかしロシター伝道部長はひるまなかつた。彼はそんな値では売らないと答え、貝は値の上がる年まで取って置くと言った。だがその必要はなかつた。大手の貿易業者がそれに同情して、1ポンド30セントを払う上に村人をただで島に送ってくれるというのである。

そのシーズンは真珠貝の売り上げで5万ドル以上の収入があり、その後2シーズン同じ方法で通した。それが終わる頃には島民は借金をすっかり返済し終えていた。その上島民は什分の一や献金をし、聖餐会にも出席するようになった。

最初のシーズンの終りに島に帰る村人たちは、島が近づいてくるとなつかしい故郷の岸辺を心配げに見つめた。だんだん近づいて農園がはっきり見えるようになると、忠実な聖徒たちのどの目にも感謝と喜びの涙があふれた。輝く朝の陽光に包まれたそこには、ココナツの葉がどれもあせた緑からつややかな深緑に変わっており、どの木にも前にも増して豊かな実がついていた。

3年の間に借金を返し、農園は元に戻り、聖徒たちは謙遜になって大きな祝福を得た。主のみ言葉が成就したのである。「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに對して責任あり。」(教義と聖約82:10)



R・レニエル・ブリッチ：ブリガム・ヤング大学歴史およびアジア研究准教授。オーレム・ユタ・シャロンステーク部第二副ステーク部部長。ジョアン・マーフィー・ブリッチ：オーレム第31ワード部初等協会第一副会長。夫妻には5人の子供がある。

# 「村を出るか、 それとも死ぬか」

ジョン・ルイス・ランド

息子はなぜ父親を敬うのだろうか。11人兄弟の末から2番目のセケリ・サレ・マヌは、そのわけを知っていた。父のサレのことを話すとき、彼は胸を高鳴らせ尊敬の念を覚えるのである。

セケリが10歳のとき、西サモアのモスラと呼ばれているサッパイテアの村に教会の支部を作るため、一家が宣教師に召された。その人々はモルモンを憎み、迫害した。あるとき地域の牧師に率られて怒り狂った暴徒が、病人を見舞っているマヌ家の人々を襲った。セケリは今でも、兄や姉たちみんなと地面に突き倒されたときのことを覚えている。牧師はサレを引っ張り起こすと木の幹にぐいぐいと押しつけ、なたをのどに突きつけて、「なぜ、私の羊を盗んだ?」と叫んだ。

「あなたが真理を知らず、彼らを惑わすからだ。」サレ・マヌは答えた。サレ・マヌは、信仰を捨てなければ一家を皆殺しにするとおどされて、こう返答した。「ジョセフ・スミスが神の予言者だということを私は信じている。」殺しはされなかったが、いやがらせは依然として続いた。そしてついに村長から、「村を出るか、それとも死ぬか」という一筆が届いた。

サレ・マヌはカヌーを二昼二夜こいで、ジョン・アダムス伝道部長にどうすべきかを相談に行った。アダムス伝道部長はサレに祈るように告げ、主は祈りに必ず答えて下さると言った。サレは導きを祈りながら、また二昼二夜を水の上で送り、家に帰ると、おびえている家族をまわりに呼んで言った。「この島のこの村に残ろう。必要ならばジョセフ・スミスが神の予言者だという私たちの証を自分の血で結び固めるのが、主のみこころだ。」

1945年12月24日に、サレの農園が壊され、木が倒され、パイナップルは掘り起こされた。村長は、夜明けまでに立ち去らないと焼き打ちにするとした。

クリスマスの朝、マヌ家の人々は晴着を着てひざまずき、祈った。男の子の白シャツが足りなかったため、セケリはシャツなしだった。暴徒が家に火をつけると、家族は炊事家に避難した。しかしそこにも火をつけられた。

ぐれんの大かがり火は村長の命によるもので、村を立ち去る最後のチャンスがマヌ家に与えられた。しかしサレ・マヌは心を変えなかった。「私の教会は真実だ。私は決して証を捨てない。だから私はここにとどまる。モルモン教会が神のまことの教会だという証を結び固めるために死ぬ

用意はいつでもある。」

燃えさかる炎に、暴徒はみんな後ろへ退いた。村長が言った。「サレ・マヌ、おまえと家族の命が助かるチャンスをやろう。一体どうなんだ。」

サレ・マヌはそれに答えた。「死んでもよい! 何をぐずぐずしている?」

すると村長はみるまに力を落とし、「おまえは聖人だ。そんな大それたことなど、私にはできない」と言った。村人たちはひとりを残して去っていった。大かがり火は燃え尽きた。その夜、警官が来て村長と牧師と40人余りの人々を逮捕した。後にすし詰め法廷で、判事が見せしめに迫害者を罰しようとして、サレに向かって言った。「これらの人々に、禁固数年の刑を含めてどんな刑罰を要求しますか。あなたの意志通りにしましょう。私たちの島では信教の自由が保障されるのです。」

しかしサレはこう返事した。「許してあげます。末日聖徒に手をかけないということで、家族のもとに帰しましょう。」

判事は判決を下した。「以後、末日聖徒は島のどこにおいても説教ができる。人数がふえれば教会堂を建てることも無論よろしい。」

その村には900名ほど住んでいたが、2ヵ月のうちにほんの少数を除いてほとんどが教会に入った。彼らから教会堂をどこに建てるか尋ねられたとき、サレは、あの大かがり火の跡に人々を連れて行った。今、ワード部の教会堂がそこに建っている。

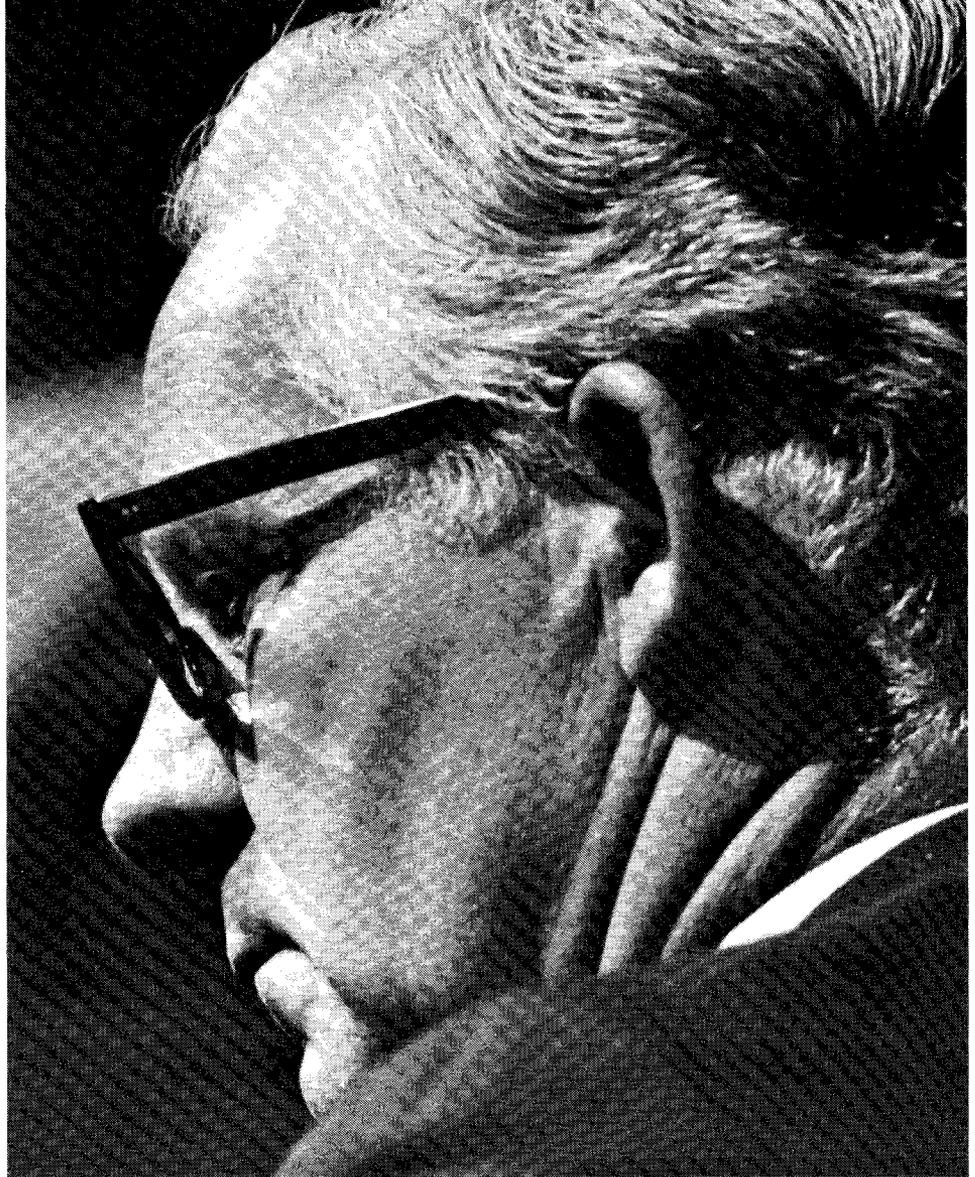
サレ・マヌは死ぬまで村から村へ福音を説いて歩いた。彼が最後に生まれ故郷のファゴマロ村の支部長をしていたとき、村の助役に会った。そのとき彼は助役が必ず教会に入ると確信したが、なかなかその言葉が得られなかった。助役は、「サレ・マヌ、もしあなたが死ぬまで忠実だったら、私は教会に入るよ」と言った。そこでサレ・マヌは生前、助役の家の正面玄関に面した墓地を買った。言わずもがな、サレ・マヌの死後、助役は一家で教会に入り、後に支部長になった。

今日、サモア全土にステーキ部がある。シオンのステーキ部が全国に及んでいる国は、ここが世界で初めてである。サレ・マヌが説いた教えの中で最も力ある言葉は、死ぬ寸前に息子のセケリに残した簡単なこの言葉である。「私のような父さんになるんだよ!」

セケリ・サレ・マヌが父を敬うのに、何の不思議があるうか。



ジョン・ルイス・ランド博士：オリンピア・ワシントンステーキ部地区のセミナリー・インスティテュート指導主事。オリンピア第3ワード部の監督をしており、召しを受ける以前はセケリ・サレ・マヌを第一副伝道部長にステーキ部伝道部長をつとめた。



## 家庭における 財政管理

十二使徒評議員会会員  
マービン・J・アシュトン

今日の世界において、豊かで幸せな生活を送るためには、財政管理を上手に行なわなければならない。次にあげる方法は、私たちが個人的にも、家族としても、財政管理を改善する上で必ず役に立つことと思う。

### 1. 早くから家族に、働いて賃金を得ることの大切さを教える

「あなたは顔に汗してパンを食べ」（創世3：19）という勧告は、現代にも通用することである。また、これこそ個人の福祉の基本である。両親が子供たちにできる最も大きな贈り物のひとつは、労働について教えることである。子供に与える月々の小遣いについては、長年にわたって多くのことが言われてきた。この小遣いに関する意見や勧告は非常に様々である。私の母校は伝統を重んじる学校で、私はそこで、働くことを教えられた。子供は、奉仕や雑用を行なうことにより、必要なお金を自分で得る必要があると思う。家には金のなる木があり、1週間または1ヵ月に一度その木からお金が落ちてくる、という考えを植えつけられた子供は不幸であると思う。

### 2. 子供たちにお金の使い方を教える

親が子供にただ「貯金をしなさい」と言ってもそれは無意味なことである。しかし、「伝道に出るために、また自転車や洋服や、ズボンを買うために貯金しなさい」と言えば、子供は貯金の理由がよくわかる。みんなが納得した目的のために一緒に貯金することにより、家族の一致が生まれる。私の家では、あるひとつの大切な計画のために娘に貯金をさせることにした。これによって家族が結束したことを覚えている。そして娘が一定の金額まで貯金できた時に、私たちは親として、ちょうど教会が、ワード部やステーキ部の建築資金や不動産などに対して行なうのと同じように、あらかじめ決めておいた金額を補ってあげたのである。

### 3. 家族のひとりびとりが家族全体の福祉に力を貸すように教える

家族の目標を達成するために、子供たちに理解できるような資金計画を立てると、子供たちは喜んでそのために働くものである。伝道中の息子または兄弟のために、毎月一

度家庭の夕べで、家族がそれぞれに得たお金を伝道資金に入れるという目標を持つことができる。これをしない家族は、金銭面でも霊的にも素晴らしい機会を逃していることになる。家族全員で、伝道中の家族の一員に毎月送金することにより、家族の一人一人がたちどころに「宣教師」となることができる。また自分の家族には伝道に出ている者がいるという誇りと、自分はその家族の一員であるという誇りを持つようになるのである。

#### 4. 誠実に正直な人間となるために、金銭的な責任を先延ばしせずすぐに果たすことを家族に教える

神は、私たちの納める什分の一を毎月お調べになるわけではない。しかし喜んで什分の一を納めることにより、身近にいる人々に一層正直になることができる。

#### 5. お金に動かされる前に、お金を動かすことを学ぶ

結婚を控えた女性は、よくこんなことを考える。「彼はお金の管理が上手かしら。自分の収入の範囲内で生活する方法を知っているかしら。」このように考えることの方が給料の額の問題よりもずっと大切である。私たちは、金銭的な事柄に対して絶えず態度を新たにし、上手な金銭のやりくりに努める必要がある。こうすることにより、夫婦間の協力体制が完全で永遠なものとなるのである。

#### 6. 金銭的なことで自己修養と自制を学ぶ

これは会計学を学ぶよりも大切なことである。夫婦が消費の衝動を抑えて、まず伴侶や家族のことを考えるときに、大きく成長することができる。

財政管理の技術は、常に協力と愛の精神のもと一緒に学ぶことが必要である。自分の妻を世界一やりくりが下手だとけなす夫に私はこう申し上げたい。「鏡の中を見てごらんなさい。ほら、世界一おそまつな教師が映っているでしょう。」

#### 7. 予算を組む

家の購入や教育、その他どうしても欠かせない投資以外、利息を払うのは避けてほしい。各種の用具や家具、車などは現金で購入し、分割払いほしくないことである。またクレジットカードは、よく注意して利用しなければならない。クレジットカードは原則的には購売者の便宜をはかるためにあるもので、むやみやたらに使用すべきものではない。新製品を購入するに十分な貯えのない時には、中古品を買うようにする。また収入の一定額を貯金や投資に回すことが必要である。また喜んで教会に献金し、自分の財政負担を支払うことにより、従順の原則を学ぶことができる。

さて、これから申し上げることをよく聞いていただきたい。中には気分を害される方もあろうが、それは承知の上である。債権者を無視したり、彼らを避けたりする末日聖徒は、そのような態度を取る人が味わう精神的な抑圧を受けることであろう。これは末日聖徒にあるまじきことである。

#### 8. 継続して教育を受ける

正式な教育をできるだけ多く修める。職業訓練学校に通うこともこの中に含まれる。これは投資する価値のあることである。全日制に通えない人のための夜学や通信教育の

クラスを利用するのもよい。こうして、特殊な技能を身につければ就職の機会が早く巡ってくるであろう。今日、失業者の数が世界的に増加している。従って失業した人は、たとえ一時的でも職があればそれにつくべきで、「自分にあった職」が与えられるまで待つべきではない。

#### 9. 自分の家を持つよう努める

これは消費ではなく投資である。この場合、自分の収入で維持できる家を購入する必要がある。家を住みやすくまた美観をそそるよういつも手入れをするとよい。こうすれば、その家を売る時に利益を得て、さらに良い家を購入することができる。

#### 10. 適切な保険をかける

十分な医療保険と適切な生命保険に加入することが、最も大切である。

#### 11. 現在のインフレの実態を理解し、それにうまく対処する

通貨の変動をよく見極め、真の貨幣価値を認識する。今日、大部分の給与所得者は、2年前に買った金額では物を買えなくなっている。インフレは、ある段階に達するまで長引くであろう。皆さんは物価高とエネルギー不足というかつてない時代に生活しているのである。このことをよく認識していただきたい。

#### 12. 適当な食糧貯蔵プログラムを行なう

組織的に、また秩序をもって、基本物品を貯蔵する。しかし、この目的のために負債を負うようなことがあってはならない。また現行の貯蔵計画が無理のない適当なものか否かという点に配慮する必要がある。

これらの提案は、ほんの一部にすぎず、全部網羅したわけではない。これらのことを真剣になって考えていただくために申し上げたのである。私たちはこうした原則を知り、よく認識する必要があると思う。

個人の福祉を正しく行なうためには、金銭の管理が重要な要素であることを、神は私たちに気づかせて下さっている。私たちは引き続き、収入の範囲内で生活するようしなければならない。また、財政的な問題に頭を悩ますことのないよう、常に努めなければならない。

末日聖徒は金銭を、永遠の幸福を得るための一手段として活用する必要がある。不注意で放漫な金使いをすると、財政的にかんじがらめの生活を余儀なくされることになる。私たちが主に近くあって主の戒めに従って生活するならば、これらのことに関して主は天の窓を開いて下さるであろう。これが真実であることを、イエス・キリストのみ名により証する。アーメン。

☆

☆

# 南太平洋の 夜明け

## —地域総大会報告—

ヌクアロハ（トンガ）

降りしきる雨の中、ある所ではくるぶしまでぬかるみにつかりながら、1万を超えるトンガの聖徒たちは、2日間にわたる地域総大会のためにリアホナ高校に集まった。

大会の前日、この地域はどしゃ降りであったが、7ヵ月にわたる準備と練習のしめくりが予定通り行なわれた。

スペンサー・W・キンボール大管長とその一行がトンガタプの空港に到着したときには、空はきれいに晴れ上がっていた。空港にはチャーチハイスクールの生徒80名によるバンド、北部のハバウ島から200名のラカラカダンサー、また一般の聖徒たちがつめかけ、レイ、歌、ダンスによる歓迎であった。

空港からソブまで12キロほどの道程は、護衛の警察官がキンボール大管長一行の車を先導した。ソブでは、ソブ伝道本部で伝統的な歓迎の儀式を受けた。

キンボール大管長は、トンガの聖徒は「この地にシオンの花を咲かせるために」トンガに留まるようにと強調した。祖国に留まり、シオン建設のため



に助け合うよう、また教会の学校を通して真理を教えるようにとの勧告である。(現在トンガには教会経営の高校が2校、小中学校が10校あり、約2,000名の生徒がいる。) 大管長はこう語った。「ブリガム・ヤング大学ハワイキャンパスで学んでいる学生が卒業後ハワイに留まったり、合衆国本土に移住したりすることなく、祖国であるトンガに帰るよう希望します。」

この大会に出席するために、多くの犠牲が払われた。およそ100人の聖徒が大会のために海を越えて帰って来た。また他の島々から長い船旅をして来た者もある。300人乗りの船に1,000人もの人々が乗り組み、肩と肩とぶつけあいながら、しかも立ち通しで、まる一昼夜の船旅をしてやって来たのである。こうして大会は開かれた。

トンガに大管長が訪れたのは、1955年のデビッド・O・マッケイ大管長の訪問に次いで、2回目のことである。しかし、キンボール大管長は1972年に十二使徒評議員会会員として、この地を訪れているので、今回で2度目になる。



大会は両日とも雨に見舞われたが、この雨を、祝福と考えた者が多かった。というのも、この雨がトンガ独特の高温多湿の気候を和らげてくれたからである。

キンボール大管長は、この雨とぬかるとのことは忘れるように、しかし、大会のみたまは決して忘れることなく受けた勧告と原則を実践するようにと聖徒たちを激励した。

### シドニー（オーストラリア）

キンボール大管長は、予言者の必要性について話し、「忠実にしかも揺ぎない信仰をもって神の予言者を支持していただきたい」と結んだ。

オーストラリアのシドニーにあるグリニッジステーク部のアイアン・G・マッキーステーク部長は、シドニーのオペラハウスの近くで1851年11月2日に初めて伝道活動が開始されたことについて話した。

ハーバーワード部扶助協会会長であるエルヴ・ミッチェル姉妹は、今日、世界の女性は「息子や娘たちに他のそれよりも強い影響を与えていること、そして、それが女性の最も偉大な遺産

となる」ことを強調した。

キンボール大管長夫妻は、ニューサウスウェールズのエリック・ウィリス知事夫妻を文化プログラムに招待した。文化プログラムでは、オーストラリアの歴史が200人近い出演者とオーケストラの音楽、歌、演劇、そして解説によって上演された。プログラムは非常に内容に富んだ感動的なもので、フィナーレと共に観客は立ちあがり、5分間もの間拍手が鳴りやまなかった。ウィリス知事からも、ショーは祖国オーストラリアに対する誇りと愛がにじみ出たすぐれたものであったとの賞賛の言葉を受けた。

大会が終りにさしかかったとき、聖徒たちは起立して『神よまた逢うまで』を歌った。歌う聖徒たちの頬が涙で光る。オペラハウスのアッシャーの人たちも目をうるませていた。彼らは教会員ではない。主のみたまが会場にあふれ、アッシャーの人たちの心をも捕えたのである。

街頭で、テレビを通して大会の様子を見ていたある年配の婦人は、宣教師にこのように語った。「私は、今日のこの日を81年間も待ち望んでいたんです





よ。」シドニーの地域総大会はこうして幕を閉じた。けれども、この大会を通して得られた感激は、これから先も、シドニーの聖徒たちの心に長くとどまることだろう。

#### メルボルン（オーストラリア）

乗客が末日聖徒の家族であることを知ったあるタクシーの運転手は、その家族に、教会員の人たちを乗せた経験を陽気に語り始めた。ところが、そのうちに話がはずみ、運転手は、突然車を道の片側に寄せると、エンジンを止め、真剣な顔で教会についていろいろ尋ねてきた。こうしてメルボルンの町でも、予言者を迎える準備が着々と整えられていったのである。

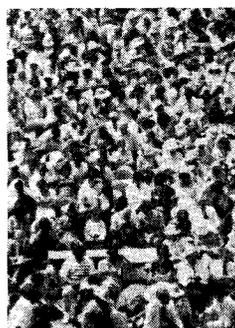
デビッド・B・ヘイト長老は、あるラジオ番組で30分間ゲスト出演をすることになっていた。ところが、教会についての問合せの電話があまりにも多いため、2番目にゲスト出演を予定されていた人は次回の放送に繰越すことになり、その番組全部の時間が、ヘイト長老に当てられた。

教会幹部が宿泊したホテルのレストランの経営者は、不思議そうにこう尋

ねた。「あのアメリカ人の一行はどういう人たちなんだろう。」そして教会幹部であることを知ると、もっともであると言わんばかりにこう答えた。「そうですね。全然違いますよ。」

大会報告も、大勢の人々からなるあのコーラスについてふれなければ、完全なものにはなり得ないだろう。コーラスは、神聖な音の響きと共に、真に靈感を与えるものであった。特に閉会の讚美歌『神よまた逢うまで』は圧巻であった。この讚美歌は、歌う者たちの心をうるおし教会幹部の顔にも、大会に出席していた聖徒たちの顔にも、明らかに満ち足りた思いが現われていた。

この歴史的な地域総大会が、出席した人々の心の中に、また、その生活にいつまでも残るものであることは疑うすべもない。確かに、この大会によってすべての人の心が奮い立ったのである。この大会を通して何が最も印象的であったかの問いに、会員たちの答えは様々であった。「主の予言者が、このオーストラリアの地に來られたこと」と語ってくれたのは、年配の大祭司であった。また、田舎にある小さな支部



の支部長は、「たくさんのオーストラリアの教会員と会えたこと」と答えた。また「家族の大切さを強調する靈感あふれるメッセージを聞いたこと」と答えたのは、4人の子を持つ母親だった。ある兄弟はこう証した。「自分が招待した隣人が、自分から、大会に出席するのを目にしたとき、最高の気持を味わいました。」

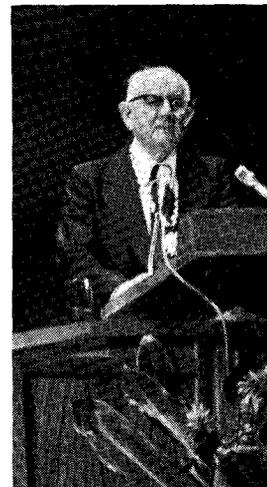


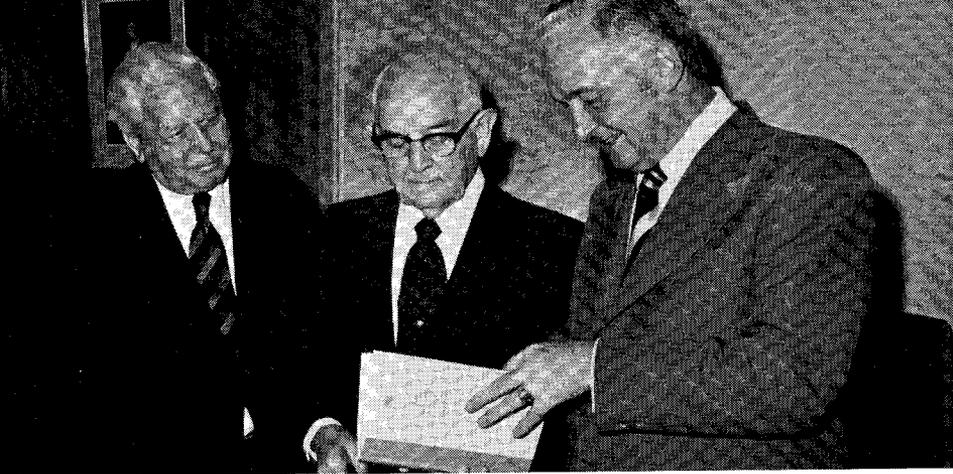
#### ブリスベーン（オーストラリア）

シドニー、メルボルンの各地域総大会に出席した教会幹部は、南太平洋最後の地域総大会開催地タヒチに向かうに先立ち、ブリスベーンで合流し、オーストラリア地域最後の総大会に列席した。

スペンサー・W・キンボール大管長の到着当時、ブリスベーンは豪雨に見舞われていたが、初等協会の子供たちによる「わたしは神の子」の温かい歌声の歓迎に、さしもの荒天も勝てなかったようである。

遠隔地から集まった多くの聖徒は、子供たちと共に、主の予言者をその目で確かめ、予言者の言葉に耳を傾けることができた。彼らの中には、ダーウィンから3,200キロの旅をして会場に





集まった家族や、インドネシアからの家族も見られた。

その聖徒たちに対して教会幹部は、福音に伴う責任すなわち家族を強め、隣人に福音の恵みを分かちため、より一層の努力を払うよう重ねて勧告を与えた。

教会幹部のブリスベーン滞在は短期間であったが、彼らのもたらした愛と靈感は当地の聖徒を末長く養い育てることであろう。



### パペーテ（タヒチ）

南太平洋地域最後の地域総大会が2日間にわたりパペーテで開催された。オーストラリアで別個の行程のもとに行動したスペンサー・W・キンボール大管長およびその他9人の教会幹部はこの大会で一堂に会することとなった。

この大会において、キンボール大管長は、タヒチにシオンを築くようというメッセージを与えた。「タヒチの人々にとってこの美しい島々はシオンです。聖徒の集合は、私たちすべてのためのものです。従って私たちは全身全霊を尽くして、この福音の真の価値を隣人に知らせる必要があります。この大切なチャレンジをしっかりと心に留めていただきたいと思います。」

あえてこの大会のテーマを取り上げるとすれば、それは愛である。キンボール大管長およびその他の教会幹部はその説教の中で聖徒たちに対する彼らの愛を重ねて明らかにした。また聖徒たちの表情からは、彼らの教会幹部に対する愛をはっきりと浮かうことができた。

キンボール大管長の言葉にあるように、この大会を通じて、聖徒たちはその霊性を高め、個々の生活の中に福音の光を輝かそうとするより強い決意をすることができた。キンボール大管長は次のように語っている。「これはタヒチにとって新しい時代の始まりと言えましょう。この大会でお聞きになられた事柄は、皆さんにとって非常に大切なものです。従って個々の生活にそれを取り入れる必要があります。」



# 扶助協会記念像に描かれた 女性の役割



女性を讃えた扶助協会ノーブー記念像。これは十数個の像から成り、女性の様々な役割を表わしている。像が置かれる庭園と3つの像の模型を見る扶助協会中央管理会会長バーバラ・B・スミス（中央）、この計画と製作にあたるデニス・スミス、ふたつの像の製作を担当するフローレンス・ハンセン。

1842年、ジョセフ・スミスによって扶助協会が最初に組織されたイリノイ州ノーブーに、過去、現在、未来の女性を象徴した像が扶助協会によって建てられる。

1975年10月の扶助協会大会で、扶助協会中央管理会会長バーバラ・B・スミスは次のように語っている。「ここ数年、いろいろな出来事に直面するにつけ、私たちは教会の女性が歩んできた貴い歴史について考えてきました。そうするとき、心は、私たちの道を築いて下さった過去の末日聖徒の女性の献身に対する感謝で一杯になります。これらの勇気ある、意志の強い、そして賢く、また屈することのない女性たちは、信

仰に支えられて、男性の傍らにひるまずに立っていました。そして迫害や苦難に耐えてきたのです。家族によき食物と、安らぎの場を与え、また子供たちを育ててきました。さらに手、心、思いを尽くして、信仰を貫くことができる環境を作り出してきたのです。利己的な目的のためではなく、教会のすべての人が定めた共通の目的、すなわち、この地上に主の王国を築くということのために働きました。この目的だけを心に留めて、過去の教会の女性たちは、末日聖徒の夢を実現しようと努力したのです。女性は神殿や集会所の建設を手伝いました。また、必要な一日の穀物を集めたり、看護やその他の

医療技術者を訓練したり、病院を設けて教会員の健康を守ったり、宣教師や伝道プログラムを援助したりしてきました。また国や地域のためにも価値ある働きをしてきました。その献身ぶりは、とても言葉で言い表わすことができません。

今日の末日聖徒の女性について考えるとき、同じような印象を受けます。彼女たちは、霊的なものではなく物質的なものに執着しているこの世にあって、福音を実践するというチャレンジに直面している勇気ある女性と言えます。今日の女性は、主が与えられた役割をなおざりにするよう、絶えず誘惑を受けているからです。

過去においても現在にあっても、教会の女性は特別な女性です。賢く、勤勉で、主のみ業をさらに進めるためにこの時代にこの地上におかれたのです。これらのことに心を動かされた私たちは、扶助協会の前会長と話し合い、ひとつの考えを出しました。大管長会の許可を得ましたのでそれを皆様へ申し上げ、皆様の意見を聞かせていただきたいと思えます。今日の教会の女性として私たちは、過去、現在、未来における末日聖徒の女性の理想を表わした記念像を作ることを計画しています。」

この記念像は現在、計画進行中である。これは、ひとつの大きな像ではなく、十数個の像から成り、子供から母親まで、女性の役割と責任を表わしている。

記念像は、ノーブー訪問者センターの正面に作られる長さ110メートル、幅73メートルの庭園の中に置かれる。記念像の製作は主に彫刻家のデニス・スミス兄弟が行ない、フローレンス・ハンセン姉妹も手伝うことになっている。

記念像の中心は、実物より大きい若い女性の像である。スミス兄弟はこれを「そよ風の中に足を踏み出す若い女性」と題し、髪とドレスを後にそっとなびかせ、やさしさの中にも信頼をかもし出そうとしている。

この像は大きな円型の花壇の中央に置かれ、その周囲に4つの実物大の像が置かれる。これらは彫刻している女性（創造性を用いることを表わす）、読書をしている女性（知的目覚めを表わす）、祈っている女性、手を差し伸べる女性（奉仕し、人を助けることを表わす）、の4つである。

並木のある小径をさらに進むと、若い家族の像（父、母、子供）がある。これらは男性と女性が協力して、神権に関する責任また子供を正しく育てる責任を果たすことを表わしている。

若い女性が3人の子供と遊んでいる像もある。これは家族の中で女性としての役割を果たせるのは母親だけに限らないことを示している。独身の女性でもなすべきことはあるのである。

また、母親が十代の息子に人生にお



扶助協会ノーブー記念像の模型に見入る中央管理会会長バーバラ・B・スミス

ける責任を全うできるよう備えさせていることを表わす像や、子供を抱きかかえている母親の像もある。

その後ろには、母親を見上げ、母親そして主婦としての未来の自分の姿を見つめている少女がいる。

このほかに、永遠に関する計画と一緒に立てている夫と妻、またキルティングをしている老婦人の像がある。この老婦人は、晩年を奉仕に捧げている。キルティングの様子は、二重の結婚指輪であり、これは記念像全体のテーマである永遠性を象徴している。

ハンセン姉妹はふたつの像を作る予定である。ひとつは、持てる才能を娘と分かち合う母親を表わす像、もうひとつは、ジョセフ・スミスと、その妻であり扶助協会の初代会長であるエマ・スミスの像である。これは訪問者センターのすぐ隣に据えられることになっている。この像は、扶助協会の歴史の

ひとこまを表わしている。このとき、ジョセフ・スミスは扶助協会の組織を開設する資金として、5ドル金貨1枚をエマに手渡した。

この扶助協会は今や世界的な組織となり、およそ100万の会員がいる。この記念像を建てるに当たって、姉妹たち一人一人に資金の援助をお願いしたい。献金者の氏名は、公園の所定の場所に記録されることになっている。

「この記念像の目的はふたつあります」とスミス姉妹は語っている。「第一にノーブーにおいて予言者ジョセフ・スミスが扶助協会を設立して下さり、女性が知識と知恵を得られるよう、その扉を開けて下さったことに敬意を表わすためです。次に、末日聖徒が理解している、福音の計画における女性の役割を、世の人々に示すためです。」

この記念像は、扶助協会設立から136年後の1978年3月に完成の予定である。

## 国際伝道部の設立

国際伝道部が設立された。これは、現在あるステークおよび伝道部の管轄地域外に住む、すべての教会員に対して責任を負うものである。遠隔地に住み、正式な連絡経路のない教会員を御存知の方は、国際伝道部 (50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150) に連絡していただきたい。

また、このような地域に移る予定の教会員も、国際伝道部を通して情報を得ることができる。



# サンパウロ神殿の鍬入れ式



3月20日(出)、ブラジルのサンパウロで南アメリカにおける最初の神殿の鍬入れ式が、十二使徒評議員会補助であり、この地域の担当教会幹部であるジェームズ・E・ファウスト長老の管理の下に行なわれた。秋空の下、2千人の会員がこの式につめかけた。

ファウスト長老は次のように語った。「今こそ南アメリカにおける神のみ業が進められる偉大なる時である。南アメリカにおける最初の神殿が建てられるこの聖なる地にこうして恵まれて立っている私たち一人一人には、自らの信仰を強め、改めてこの地における神の忠実な聖徒になるという強い望みを抱くよう、チャレンジされている。」

ファウスト長老はさらにこう続けている。「この神殿の正面の扉には、『主の宮居 (The House of the Lord)』『主の聖所 (Holiness to the Lord)』と書かれるだろう。南アメリカにおいて聖なる建物にこの言葉が書かれるのは、いかなる言語をもってしても初めてのことである。この建物は、神の子供を救い、昇栄を得させるために建てられる。」

式典はわずか45分程度のものであった。ファウスト長老のほかに、十二使徒会地区代表や地方の神権指導者も出席した。またサンパウロの各ステーク部の男女100名による合唱がこれに花を添えた。

祈りの後、ファウスト長老および同席の指導者は、神殿の日の栄の部屋にあたる場所に立った。式の間その場所に立っていた会員たちはファウスト長老たちが近づくと、喜びの涙を流して握手を交わした。

「1976年3月20日、サンパウロ神殿鍬入れ式」と刻まれた特別なシャベルで、ファウスト長老が最初に地を掘り起こし、続いて3人の地区代表、ソレンセン長老、カマーゴ長老、カブラル長老がシャベルを入れた。さらに地元の指導者、そして会員たちもシャベルを入れた。

特別なシャベルで鍬入れをするブラジルサンパウロ西ステーク部のジョーズ・ベンジャミン・プエータステーク部長。その後ろは、左よりオシリス・グローベル・カブラル長老、ジェームズ・E・ファウスト長老、アントニオ・カロス・デ・カマーゴ長老。

## 家族の証

日本神戸伝道部 岡山支部

入江栄子

## 神様の大きな家族の一員に

私たち家族は今、神様の大きな家族の一員に加えられましたことを心から感謝しております。そして多くの御恵みをいただき、日々を心ゆたかに暮らすことができますことを感謝しています。私たち家族が、この教会の会員になりましたのは、1975年3月22日



です。その日は前日まで雨が降り、バプテスマの日も雨降りかしらと少し心配していましたが、雨もやみ、風もお

だやかな良い日となりました。本当は前の週の土曜日にバプテスマを計画しておりましたが、どうしても主人のタバコがあと1、2本になってやめられず、1週間のぼして頂きましたので、ふたりの子供たちにと

っても大変待ちわびた日でした。そして新しく岡山の地に転任されたばかりのマイコ長老様にふたりの子供のバプテスマをして頂き、心の中にこみあげる素晴ら

しい力を感じました。そして私と主人は最初るときから私たちを熱心にお導き下さいましたレイニー長老様にバプテスマを施して頂きました。たくさんの方の会員の皆さんの祝福を頂き心からこの教会の会員になれましたことを感謝し感動で一杯だったことを憶えています。



大晦日からお正月へと、あわただしい中にも新しい1年を迎え、家族みんなが希望に胸をふくらませていました。特に去年は今年中学生になります長男の部屋を建増しする計画がありましたからそのことで頭が一杯でした。そんな矢先、主人が1冊のモルモン経を持って帰りました。そして今度の火曜日家に宣教師が来られるから一度会ってみなさいということでした。初めての外国の方の訪問ということで、私も子供も火曜日を楽しみにお待ちすることにしました。そしてその当日、判で押したように約束の時間丁度にドアを叩く音がしました。外国の方の訪問ということではどなたが来られるかしらということと会話がうまくいくかしらという不安で一杯でしたが、次の瞬間私の不安はことごとく解消されました。あまりに誠実で礼儀正しい好感のもてるふたりの宣教師様に私は素晴らしいものを感じました。そして永遠の生命についてお話をお聞きし、讃美歌39番『家庭の中に』を家族みんなで声をあげて歌いました。私たちは本当に家族で歌を歌うということは今までありませんでしたから非常に和やかなうちに終わりました。この方たちが神様の召しを受け主のみ言葉を私たち家族に伝えて下さるために来られたということを知りました。

第2週、第3週とレッスンが進むにつれて、私の知っている宗教ととても感じが違うということを感じました。宣教師様が2年間まったく自費で宣教活動をされているということ、そして知恵の言葉でもそれだけに真剣な何かを感じました。そして救いの計画の素晴らしさ、何にもまして家族の幸福を第一の基としていることも教えて頂きました。しかし教義の素晴らしさに共感を持ちつつも、私は真剣に考えこむようになりました。それは、はたしてこの教会が正しい教会なのかということでした。そして本当の奥義を知りたいと思いました。日本にはあまりに多くの新興宗教がありましたし耳なれないモルモン教会ということからくる不安がありました。そしてそれにも増して私たちには10歳と11歳の男の子がいますので、安易に同調して、もしも間違った宗教であったとき親として子供たちに申し訳がたないと思ったわけです。私は心から正しい教会であるという証を得たいと望みました。そのために常にお祈りすること、そして聖典を読むことを教えられました。でもなかなか私には証を得ることができませんでした。

私たちの家は教会からとても遠い距離にありましたからおふたりの宣教師様の熱心な教えにお応えすることができそうになくて申し訳けないから、どうかお断りして下さいと主人にお願いしましたところ、主人に「私たちの今までの人生のうちこのような機会に恵まれたことはなかったのでこの機会を大事にしなければならない、お断りすることはいつでもできるのだから」と、さとされました。私はそれからおふたりの宣教師様のすべてを信じてついて行こうと考える気持ちになりました。そうすると不思議と心の中に安らぎが湧いてまいりました。それからの私は宣教師様の来られる日がとても待ち遠しくなりました。子供たちのお祈りの言葉に涙を流すこともありました。

3月の声を聞いて宣教師様から3月15日を目標にどうかよく頑張ってくださいと言われるほどになっていた矢先、私は教義と聖約を読んでいるうちに第119章の1節「…われ人々その剰余の財産をことごとくシオンに於けるわが教会の監督の手に納めんことを求む」というくだりに出会いました。丁度建増しの最中で金銭的に四苦八苦しておりました子供も大きくなりそろそろ進学のための準備金も貯えてやらねばならないと思っておりましたので、私は主人にとっても今のような小さな証では私はこのような戒めを従順に守ることはできないから、今度は本当にちゃんとお断りした方がいいのではないかということをお話しました。私はそのときお断りしたときの自分を考えてみました。私にはそれも耐えがたい悲しみでした。でも私の心は十中八九お断りすることを決めてました。

そして次の約束の日を迎えました。その日、2年間の宣教活動を終え、もう近々ハワイへ帰られるペイン長老様が一緒に来られました。そして私たちが話を切り出す前に、什分の一についてお話したいと言われました。私は什分の一という意味を知りませんでした。宗教の第一原則は神を信ずる信仰を持っていることを認めることである。そしてその認めているかいないかは与えることによって見分けることができるということ、そして私たちは神様からすべてのものをいただいているということ、またその中の什分の一を神様にお返ししなければならないということをお話されました。私はそのとき自分の心の中を見すかされた感じで非常に恥ずかしく思いました。そして、今まで自分の心の中にあつたすべての迷いが丁度暗雲がぬぐいさられ青空が見えて来たような素晴らしい気持ちにさせられました。

私たちのことを心から愛して下さい、誠心誠意神様の教会にお導き下さいました宣教師様に心から感謝しますと共に、この祝福を与えて下さいました神様に心から感謝しています。

